015482-001-3

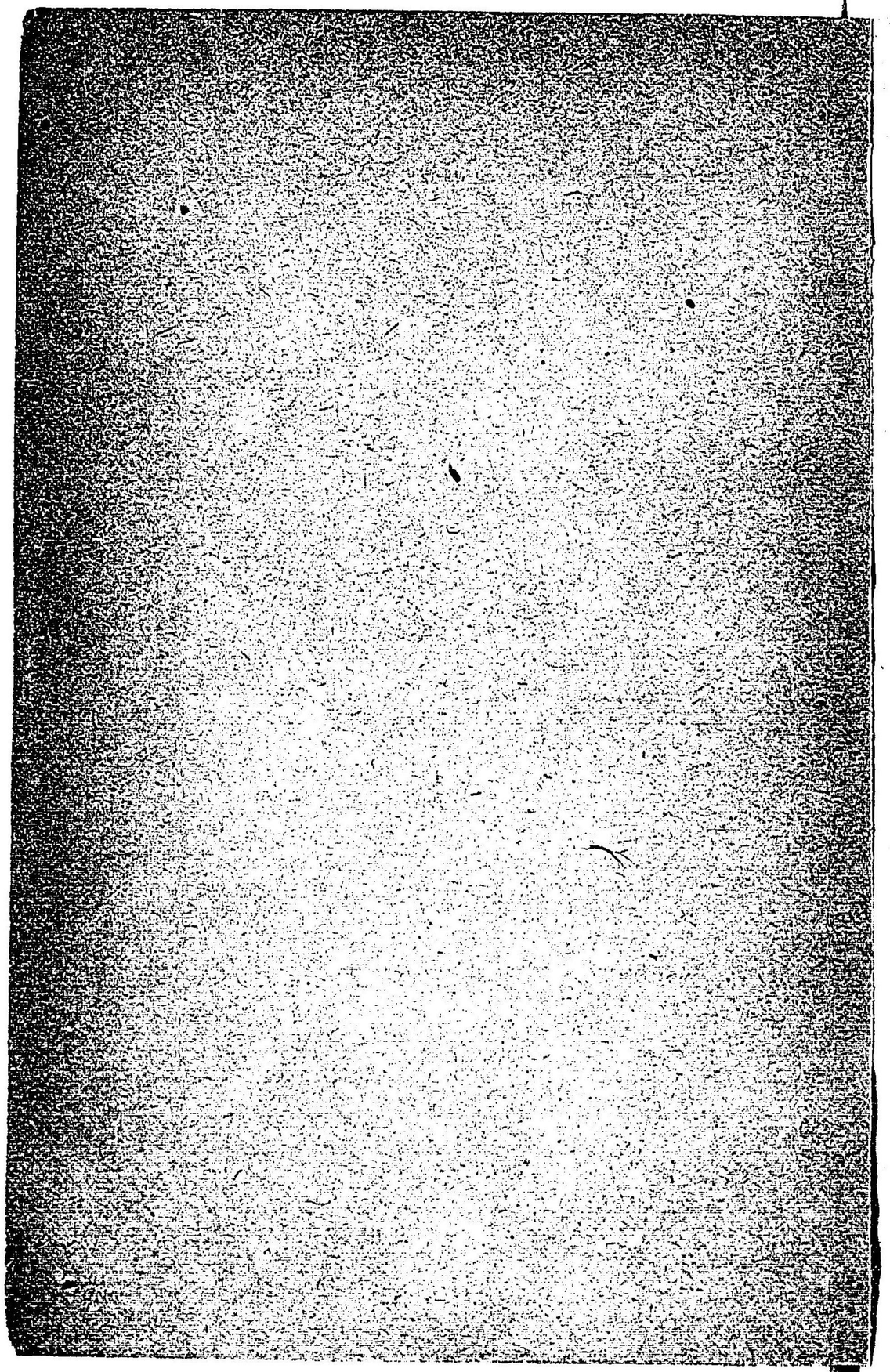
特18-298

仏教修身講話

苅屋　哲公／述

M38

ABC-1156



特18
298

佛教修身講話序

吾が友老龜苅屋君は篤學力行の人なり。職に罪囚の教化に盡瘁せらるゝこと年有り。君が少時より苦楚を嘗め來るや、つぶさに人情の奥秘を窺ひ。君が家庭の至淳なる、深く人生の妙趣を味ひ。敬虔なる信念、精細なる用心は、一々教誨壇上の力ある雄辯となりて、囚人の枯腸に肉し、靈熱を死灰に燼やせり。爲めに遷善の美を效たせしもの尠からず。謂つべし現時教界の泰斗たるを失はずと。此篇君が教誨の涓滴のみ、而かも旨義明快、説序次あり。渺たる此小冊子を以てしても尚彼の頑冥を飜へさしむるに足るなり。予は亦博く此書に因りて救はるゝの人世に多かるべきを信ずるなり。

明治三十七年十一月一日於六條學會

富井隆信識

内交

自序

これは失意逆境の人々に對し。過去一年間に於て。話をした覺書で。誠につまらぬものではあるが。各篇連絡を失はぬ樣とに聊か注意し。聞くものをして。昨話今說。呼應の便を得せしめたつもり。どうせ足らはぬ勝ちではあるが。マア讀んで見て下さい。

佛教

修身講話目次

第一　我等に必要なるもの

○精神の家宅……一頁

○精神の指導者……六頁

第二　宗教の要領

○慈悲……十二頁

○二門……十八頁

第三　人生と宗教

○二境の迷ひ……二十四頁

○處世の標準……三十頁
○眞正の至誠……三十五頁
○眞正の力……三十八頁
○煩悶なき生活……四十二頁
○常住の至誠……四十七頁
○與へられて保持すべきもの……五十二頁
○笑ふのみに非ず時には怒ることあり……五十七頁
○君の恩……六十一頁
○親の恩……六十七頁
○佛の慈光……七十三頁
○相濟まぬといふ觀念……七十九頁
○社會の恩……八十二頁

○闇路の光り目次

一、煩惱の原因……八十九頁
二、順逆の二境……九十五頁
三、目的と手段……九十九頁
四、小心翼々……百三頁
五、教育の話……百五頁
六、百行の本……百十二頁

○附錄信海一滴目次

一、理屈好き……百二十一頁
二、意地……百二十九頁

三、無我……百三十五頁
四、他力攝化……百四十六頁
五、親心……百五十三頁
六、此世の極樂……百五十六頁
七、稱名念佛（心の護衛）……百六十二頁
八、實驗の教訓……百六十六頁

以上

佛教 修身講話

苅屋哲公述

第一 精神の家宅

我等に必要なるもの

宗教の話をすれば嬉し相な顏をする人もあるが。厭相な顏をする人が多い。それはそういふ理であらふか。思ふに宗教といふものは左程人生に關係のあるものではない。あつてもなくても人生に差支のあるものではないと。いふやうな考をして居るものがあるのではあるまいか。西洋では此宗教といふものは。人生に密接なる關係のあるものであるといふことを。能く合點されて居るものと見へて。今から三十年前即ち維新の早々。日本の政治家や學者が洋行して。

あなたの宗教はと問はれて。無宗教であると答へ。散々失敗つたといふ話も殘つてある。我が國に於ては文明の今日になつて尙は宗教の必要を知らず。私は無宗教であると平氣でいふて居る人のあるとは。ぞういふなさけない事であらうか。此の如き輩はお前はどんな家に住んで居るかと尋ねられて。ハイ私は家無しでござると平氣で答へるのと同ト事である。せめては九尺二間の茅屋でござると答へらるれは。またしもであるに。家なしでござるとは、マアぞういふ恥晒しであらうか。人の門に立つ食乞でさへ。土橋の下や辻堂を我家として。雨露を凌いで居るではないか。

家といふものは五尺の身體を休めるところである。雨や露を凌ぐところである。人に家がなければ病氣に罹る。身體の休まる時がない。人は身体を安め病氣を防ぐために家を要する。かくの如くにして精神にも亦家を要する。何故といふに精神の病氣を防ぐためである。身體には病氣を防ぐところと。安めるところが要るが。精神にはそれは要らぬといふ人はあるまい。精神の家とは何であるか。宗教である。宗教は實に精神の家である。金殿玉樓であつても茅屋でないと。

かくの如く說き來るときは。成程さういへばそんなものであるがと宗教家がよい加減の事をいふのでは決してない。法華經に「大慈悲を室とせよ」と說いてある。慈悲とは卽ち宗教の事である。されば慈悲を以て家とせよとは、宗教を以て家とせよといふことである。孔子が「仁は人の安宅なり」といはれたも同一である。仁とは慈悲の事で。卽ち宗教の眞髓である。宗教は人

人の安らかなる宅なりといふの意である。基督教に博愛といふも。やはり佛教の慈悲と同ド心持で。唯廣狹の差があるのみである。かくの如く佛陀聖賢口を均しうして。宗教は精神の家であるといふの意を示されてあることであるから。各方は決して疑はず危ぶまず。

此家の中に精神を宿して貰ひたい。

先日も新聞の雜報に。或華族が此度西洋から立派な獵犬を買入れられ。その獵犬の小屋に困つて。まんさら百圓や貳百圓で買はれぬ犬を。椽の下や庭の隅に寢さす譯にも行かず。といふので技師に命じて犬小屋を建築させた。その費用が壹千圓かゝつたといふことが書いてあつた。ナンと奢れば際限のないものではないか。犬小屋にでさへ壹千圓を費す位なら。御主人の起臥しする家はドンナに立派なものであらうか。兎ても我々貧生の想像することも出來ぬ位のものであらう。サア世間にはそれほど立派な家に生活して居る人もあるが。これは五尺の身體を安めるところの家である。精神の家はとたづねて見るときは。御氣の毒だが九尺二間の茅屋も持たず。土橋の下も辻堂もない。まるで野宿である。餘所の話ではない。此中に精神を野宿にして居る人がありはせぬか。

精神の家を持たぬ人は。浮世の苦みを安める時のない人である。貪欲の雨。瞋恚の風。愚痴の露を凌ぐことの出來ぬ人である。故に精神に疾病を釀すことゝなる。犯罪の原因もいろ〳〵あるが。宗教を持たぬことが第一の原因であるといふことを。拙者は斷言して憚らぬ。統計表に就て之を見るも。福井縣の如き廣島縣の如き宗教繁昌の地には。犯罪者が著しく少いのが。何よりの證據である。どうぞ各方も速に此精神の家の中に起臥する身となつて下されよ。かく

なれば各方の厭な心の苦みも安まることを受合ふ。各方の精神の病氣の全快することを保證する。浮世の雨は注ぐが如く降るも。浮世の風はすさまじく吹くも。宗教の家は流れもせねば仆れもせぬ。我々の宗教は我々如き凡夫の建てた家ではない。慈悲と智慧の缺目のない。妙覺果滿の佛樣のお建てなされた。金剛堅固の大伽藍である

○精神の指導者

言行忠信といふことを。大無量壽經に說いてあるが。人は常に言行忠信でなくてはならぬ。孔子も論語に。言忠信行ひ篤敬ならば。蠻貊の邦といへども行はれん。言忠信ならず行ひ篤敬ならざれば。州里といへども行はれずといはれたもこれである。忠信といふも平たくいへばマコト。言語擧動にイツワリなく。各その職業に勉めてゆくならば。誠に結構なる事で

ある。然るに世には結搆を嫌うてつまらぬ境遇に陷り。泣いて見たり癇癪を起したりするものが多い。凡そ詐りをいひ僞りを行ふほど骨の折れたものはない。之に反してアリノマヽをいひ。アリノマヽを行ふほど樂なことはない。その樂な方をすてゝ骨の折れる方をとり。剩へその結果は一粒萬倍の苦を受けねばならぬと知りつゝ。此の如き人は飛んで火に入る夏の虫とでもいはうか。誠に氣の毒千萬のことである。そこでどうぞ人の幸福を增進してやりたいと。道德を說き法律を立て。吾人に指導を與へて履行すべき大道を示し。吾人に制裁を加へて外道に入らぬ樣にしておるのである。實に法律と道德とは。吾人の言行を忠信にせねばならぬ樣に。手を引いて世を渡らせるものであるから。我々は此法律と道德の制裁指導に背かぬやうにして行けば。言忠信行ひ篤敬ならざらんとするも。行ひ篤敬ならざら

んと欲するも得べからざる次第となり。小にしては一身の幸福一家の安寧。大にしては國家社會の安穩幸福となる。人にして幸福の欲しくないものもなし。安穩の望ましからぬものもあるまい。どうか各其望むところの安穩幸福を得ることに勉めてもらひたい。

然らば言行忠信の人となつたれば。これで十分であるか。如何にも結構であらう。けれどもこれだけでは佛造つて眼を入れぬ憾みがある。今一段進まねばならぬ。イヤそれは餘り注文が多うすぎる。中々人間といふものは。そんな具合にうまく言語もマコト。行ひもマコトといふやふに進まれるものではない。然るにそれでもまだ望みがある。注文があるとは所謂隴を得て蜀を望むの類。さうでない御覽なさい世の中には色の白い女がある。なるほど美い。又天麩羅時計といふものがある。金のやふに見へる。色の白いが其實白いのは

なら美いけれども。白いものを塗つたのでは反て穢いではないか。金のやふに見へるはよいけれども。中味が眞鍮では反て淺間しいものではないか。言行忠信の人必ずしも假裝的タシナミとは言へないが。その末に馳せて其本を忘れてはならない。白うさへあればよいと思へばおしろいもぬる氣になる。光りさへすればよいと思へば鍍金もする氣になる。おしろい塗るのが惡いではない。鍍金するのが惡いのではない。塗つたおしろいが湯に入つてもはげねはお樂みである。鍍金が砥石にかけてもはげねは德用である。然るに悲いことには御座敷に手をついて。座つてばかりは居られず。動もすれば汗で流れる擦れてはげる。時計も居間の柱にかけてばかりおくべきものでない以上は。一年二年の内には地金が出る。これその本を正うしてないからである。大無量壽經に言行忠信と說いてある

直ぐその次に。表裏相應と説いてあるのが此處の道理である。人間としては心と口と。心と行と相一致せねば。いまだ上等といふに足らぬ。彼の薔薇の花は美い花で。良い香ひを以て居るが。枝に刺のあるのがはなはだ殘念でないか。言語行爲は如何にも立派でも。心のつまらぬものはその言語行爲の立派なのも。うらむらくは白粉同樣。一朝變つたことに遇へば。落ちもすれば剝げもする。鍍金とおなじく誘惑に遇へば必ず擦りむける。そも〳〵言語行爲は末であつて心は本である。心の本が修まつて居らずして。言語行爲の末のみうまく修まるはづがない。心に誠はなくして言語行爲に誠のあらうはづがない。もしあらばそれこそ白粉的誠。鍍金的誠。汗でもはげる誠である。帶で摺れてもはげる誠である。故に人に言行忠信ならんとするよりも。表裏相應が大事である。心は根で言行は枝である

成程聞けば合點がまゐりました。然らば言語行爲の誠なるやふ。制裁指導するに法律道德のあるが如く。精神の純潔即ち心の誠なるに至るには。何か手を取つて牽いてくれるものがありますか。宗教は我々精神の家宅であると前に說いておいたが。宗教は又我々精神の案內者である。人は心をどう持つべきものか。富んだときのこゝろの持樣。貧いときの心の持樣。出世したとき。落魄れたとき。願ふ望みの協ふたとき又協はぬとき。失敗つたとき。病氣のとき。すべて世に處する上に於て。二の足踏んで迷うことが常にあるそのとき。我々の心の手をとつて安全な道に進ませてくれるものは。法律の力でも道德の力でもいかぬ。卽ち宗教の力である。宗教の專賣特許である。又我等が法律も道德も制裁することの出來ぬ罪を造つたとき。卽ち巧みに法網をくぐり道德の網をもれたる罪は。正に宗教

の制裁があるのである。否世に免るべからざる制裁のあることを知らしめるのは宗教である。

かういふ具合で。宗教は心に制裁と指導を與へるもので。人らしい人とならんとするものには。一日も片時も欠くべからざるものである。

るといふことを承知してもらひたい。宗教は葬式や佛事の道具では決してない。

第二　宗教の要領

○慈　悲

前回なり前々回なり。引續いて人には宗教が必要であるといふ話をしたのであるが。多分了解出來た事と思うて居るがどうであるか。成程宗教は我々に必要なものであると合點行つたが。これが合點

行つたならば。進んで其所謂宗教といふものは。如何なるものであるかといふ事を。尚詳く話をすることゝせう。

一口に宗教とはいふものゝ。實は其種類が甚だ多い。各方の知つて御座る宗教だけを數へても。隨分澤山のものである。佛教あり。神道あり。耶蘇教といふ中にも。阿彌陀樣を拜む宗旨もあれば。觀音樣を拜むやら。お釋迦樣を拜むのやら。八家九家と昔は言ふたのだが。明治の今日では丁度十二宗三十派と分れてある。

神道の中にも神宮教もあれば大成教もあり。蓮門教だの金光教だの屋敷を拂うて田を賣り玉へと拜む宗旨も出來てきた。それから耶蘇教の中にも。新教もあり舊教もあり。又ユニテリアンといふ高尚なるもあれば。救世軍といふ勇ましいのもある。其外世界各國の宗教を集めて數ふれば。實に何百種といふほど澤山あることである。其

中で一番盛なのが佛教で。世界人口三分の一までは佛教徒である。其次に澤山の信徒のあるのが基督教。其次が婆羅門教。回々教。猶太教。シック教。拜火教等。六七種の宗教が最も大なるものである其中でも佛教基督教の如きは。甚だ盛大なるものであるから。此二つの宗教に就て話をせうが。基督教には博愛と說き。佛教には慈悲と說いてある。基督教の博愛と佛教の慈悲とは。實は甚だ差別があつて。基督教には人間にのみ愛を布き。佛教には禽獸虫魚。草木國土の非情のものまで。慈悲を垂れる。卽ち廣狹深淺の差別はあるが均しくナサケには相違ない。イエスキリストは多くの人類のために礫にせられて恨まず。釋尊は王位珍寶を捨てゝ顧みず。どうかして迷にさまよう衆生をして。悟を開かしめたいと樹下石上に艱苦を嘗めさせられたのである。

然るに世の中には。宗旨といふものは葬式や佛事の道具の如く心得て。若いものは宗旨はいらない。六十も七十にもなつてから。そろ〳〵寺參りを始めやうと。至極ノンキな考を持つて居るものが多いのは。抑々大間違といはねばなるまい。宗教の眞面目は佛事にあるのではない。慈悲心を以て心とし。現世安穩後世安樂といふ所にあるのである。兎角人間といふものは其本を忘れて末に走り易いもので。昔都に物數奇な男があつて。小野小町の容色のよいといふ事を聞き。一度顏が見たいものである。小野小町は穴無しだといふことである。それほどの諸藝といひ容色といひ一点の穴のない。完全圓滿の美人は一代や二代に二人とあるものでない。どうか一生の思出に。一度見たいと志を立てゝ。旅の用意を整へて十日かゝつたか二十日かゝつたか漸くにして出羽の國。卽今日の羽前羽後だ。小町

は出羽の郡司小野良實の娘である。小野小町の住んでをる屋敷の前を。毎日々々東へ行つたり西へ行つたりして。出て來たら見やうと辛抱して居るけれども。中々出て來ぬ。其男も遂に根を切らして。宿屋の亭主に相談をする。どうしたならばわしの本望が達せられやうか。よい分別はあるまいかと顏を青うして愁歎して居る。宿の亭主が思案して。宜敷う御座りますか。私が少しの傳手が御座りますから。賴んで見ませう。どうぞ賴むと亭主の返辭を待つて居る。亭主がにこ〳〵歸つて來て。丁度宜敷い事が御座りました。小野の屋敷の隣のうちは。少し懇意に御座りますので賴んで見ましたが。丁度明日は小野の屋敷の裏の茶畑で。茶摘がある。そこでお客樣は隣屋敷の二階へ上つて御覽なされば。小町も必ず茶摘に出るから。とつくりと御覽なされませとの注進。これは如何にも有難しと。其夜は

碌々得眠らず。夜の明けるのを待兼ねて。隣屋敷へ行つて待つて居る。如何にも今日は茶摘と見へて。女中なども澤山出ておる。中に奇麗な手拭被つた。衣裳の一番立派なのが音に聞へた小町で御座るといふので。例の奇人。眼を皿の樣にして能く〳〵見れば。顏は能く見へぬが。これはしたり。腰の曲つた婆々である。イヤハヤ名物といふものはこんなものかと失望して歸つて仕舞つた。後で聞けばあれは丁度小町が茶畑で小便をして居つた所であつたといふ話。世の中の人が宗教は葬式や佛事の道具であると。思うて居るのは。宗教といふ美人が小便をして居るところを見て。宗教は別に人世に必要のものではないといふの愚ではあるまいか。宗教の眞面目は。サケである。慈悲である世の中に慈悲ほど貴いものはない。此貴い宗教の眞面目を忘れて。其枝葉に目を付けて居るといふは馬鹿げた

話といはねばなるまい。

此慈悲心は我々精神の家である。一日も我々の離れてならぬ案内者である。五十年の人生を美く渡り。未來永劫の悟を得んとするものは。決して此宗教の眞面目を見誤つては成らぬ。

○二　門

先日以來宗教の話をして居ることであるが。第一宗教は我等に必要なるものであるといふこと。第二宗教は如何なるものであるか。その眞髓は慈悲といふことに外ならぬことを話したのであるが。今日は尚進んで其宗教を我々の信ずる上に於て。どの樣に骨の折れるものであるかといふ話をする積りである。

「わけ登る麓のみちは多けれど。おなじ高ねの月を見るかな」と。古の人が詠んだ通り。宗教の目的とするところは一つであるけれども。其目的を達する方法手段に至りては。千差萬別である。亞米利加へ行かうとするに。長崎から出て印度洋やら太西洋やらを渡航しても行かれる。又横濱から出て太平洋を一直線。澤山働きに行く布哇の方を通つても行かれる。長崎から出るときは西へ向いて行くのであり。横濱から出るのは東へ向いて行くのである。西と東の大差別はあるけれども。行着く都は米國の紐育。アお前は印度の方から來たと。私は布哇の方から來たと。互に話をすることが出來る。宗教も其通り。悟を開いた處になれば西も東もないものなれども。悟を開く處迄では。座禪で悟りもすれば念佛で悟るもある。耶蘇や婆羅門は暫く措き。佛教の中で申すなら。昔は八家九宗と數へたものゝやが。今は十二宗ある。即ち法相。華嚴。天台。眞言。曹洞。黃檗。臨濟。淨土。眞宗。日蓮。融通念佛。時宗である。此中には神道の人や耶蘇の

人も或はあるかも知らぬが。多くは佛教の人であらう。法相でなければ華嚴。禪宗でなければ大念佛。眞言か日蓮か。將た眞宗か。十二宗の中何れかの人であらうが。其宗旨々々によりて道行は違う。或はお題目で助かる宗旨もあれば。或は念佛で成佛する宗旨もある各方は自分々々の宗旨のわけは能く知つて御座るであらうな。動もすれば先祖代々流を酌む宗旨のわけを知らぬ人がある。否自分の宗旨の名前も知らぬ人があるやうである。誠に氣の毒なものである。それならば私は大念佛。私は日蓮宗と。先祖代々の宗旨を能く明瞭に答へ得る人はよいがといふに。宗旨の名も知らぬよりはよいけれども。私の內は代々眞言であるといふやうな人は宗旨は家についてをるもので。系圖の一つでゞもあるやうに思うて居るのであらうが。よく思うても見られよ。其家が何代眞言であつたはとて。火事で燒けたとき其家が大日如來の極樂へ參るものではあるまい。其家が何代眞宗であつたればとて。大水で流れるとき其家が西方のお淨土へ參るものではあるまい。各自々々の心につくものである。此わけさへも知らぬ樣な事では。自分の宗旨の立方も碌々分つては居るまい。實に無頓着千萬といはねばならぬではないか。此無頓着なものに引換へて。世には能くうろたへる人がある。先祖代々流を酌む宗旨の事は。よいかわるいか知りもせずに。頻りにうろたへまわる人がある。先達も入監した人の中に。相當の財產も有つたのに天理教に迷ひこみ。屋敷も家も拂うて仕舞ひ。田を賣り畑を賣り盡し。糊口に窮して致方なしに。天理教會の通帳を以て詐欺をして。何ケ月かの刑を受けた人があつた。これらは自分の禮に寶のあるをば知らずして。水中の

月を捉らうとして溺れたものとでもいうてよからう。

さて色々と宗旨は別れてあるけれども。之を要するに慈悲を他に施して安心立命の域に至るか。慈悲を他から受けて悟を開くかの二つより外はない。宗教の精粋は慈悲であるといふことは前に話した通である。此慈悲の心は吾々の朝な夕なに離してならぬ心であるが自分の力で慈悲をたもつか。佛陀の力で慈悲をたもつかの二つである。瀉關車たるか。乘人となるかの二つである。瀉關車は自分の力で目的地に達する。乘客は瀉車の力で目的地に達する。乘すか乘るかの二つである。十二の宗旨三十の分派。詮ト來れば皆自力で迷を離れるか。他力で悟を開くかの外はないのである。太陽は自ら光を放つ。月は太陽の受を光けて光る。恨むらくは吾等末世に生れ。煩惱強く根機拙く自ら光を放つの太陽たることは甚だ六ケ敷い。そこ

で大慈悲を以て心とし玉へる佛陀の光を受けて。自らの光となし佛陀の心を以て心とするの覺悟を爲し。四六時中佛陀の光明の中に住するの身とならば。獨り行くときでも猶影に恥づる底の心地で。五十年の人生は常に佛陀の命令の下に動くのであるから。至極氣樂などうしたらよからうかといふ煩悶なしに。一にも佛陀の命に聞き。二にも佛陀のお思召に遵ひ。大手を振つて過ぎることが出來る。死しての後も佛陀の慈悲にはからはれて。決して惡趣に沈むの懼はない。見眞大師慧燈大師の勸め玉ふ處は卽ちこれである。然しながら自ら光を放つて太陽たらんとするの人は去つて三密の加行を爲すも可なり。面壁九年を學ぶも可であるが。吏農工商其職を棄てずして。美い心を養はうとせば。他力の慈悲に限るのである。

これで宗教といふものは。マアこんなものだといふことは分つたものと見て。これからは人の此世に處して行くに就て。宗教とぞんな關係があるか。卽ち人生と宗教といふことを話すことになるからその積りで聞いてもらひたい。

第三　人生と宗教

○二境の迷ひ

平重衡が平家沒落の後。源氏の囚はれ人となつた時。千年の前といふ美人をして舞はしめ。自ら謠うたといふ句がある。「燭暗數行虞氏淚。夜深四面楚歌聲。」これは昔支那の楚といふ國の豪傑項羽が千軍萬馬を叱咤するの勢盡き。今や自殺をせんとするの時最後の宴を張り。かねて可愛がつた美人虞氏をして舞はしめて暇乞をした。其時の有樣を歌うて。燭暗云々と重衡自身の身に引較べて。英雄の末路を感慨したのである。平家物語を讀んで此處に到る毎に。涙が出るほど哀れな事である。水の流と人の行末とやら。實に世の中の事は昨日の榮華も今日の零落。有爲轉變の憂喜世の有樣は走馬燈籠の如く速かなるものである。此中の人にも商業の失敗からして。今日の境遇に陷つたものもあらう。昔は羽織と袴を常着にして居つた人もあらう。一々身の上話を聞いたらば。嘸氣の毒な人が澤山あることであらうが。マーあまりくよ〳〵歎いたものではない。一たびは帝位に上つたナポレオンも。時に利のない塲合には。セントヘレナといふ孤島に。配所の月を見たためしもある。唯失敗つて益々奮發すると。自暴自棄に陷つて仕舞うとの差別があるのである。人の世に處するに當りて我思ふ通りに仕合せを得るときと。思は

ぬ不仕合を得る時とある。仕合を得るときを順境。不仕合を得るときを逆境といふが。人は順逆二境に於て迷うてはならぬ。順境に於て迷うといふはどういふ事であるかといへば。人間といふものは調子に乗るといふ弱點を持つてをる。商買が繁昌すると調子に乗る。そこで萬事に氣が弛み。思はず知らず奢るやうになり。人氣がわるくなつて失敗する。丁稚が番頭になつて調子に乗る。下女が奥さんになつて調子に乗ると貪欲といふ煩惱が頭を擧げて。足ることを知らぬやうになる。此足ることを知らぬものほど哀れなものはない。大黒さんといふ福の神は。足る事を知るといふ福の神。大黒頭巾は上を見ぬやうこしらへてある。欲といふものはよい加減にしておかぬと。終には欲の股を割くとやらいふことになる。ポープといふ人の語に。「人生の航海には道理之が羅針盤たり。情欲之が大風たり」といふてあるが。實に足るを知らざる情欲は。人生の航海に浪を起すところの大風である。佛教には我々の煩惱惡業を大別して十惡としてある。「十惡の並び立ちたるその中に。貪欲坊のせひの高さよ」と。詠んだ人もある。兎角調子に乗つたときには。欲の股を割くものであるから。能く〳〵注意せねばならぬ。それから逆境即ち不仕合の時になると。泣いたり怒つたりする弱點を持つてをる。佛教でいふ所の瞋恚と愚痴の煩惱である。不仕合に陷り殘念で〳〵堪へられぬといふ感情が起る。その殘念などいふ感情の強いものは瞋恚となり。弱いものは愚痴となる。不仕合になつて徒らに前後策を施さうとはせずして。徒らに怒つたり泣いたりしてをるのは迷ではなからうか。小いことでいふて見れば。かういふ具合にして拾圓ほど金を儲けうと思うて。幾分の資本と心

配をかけてやつて見た。ところが當事と何やらは向うから外れる。もうけるどころか資本も子も損になつて仕舞つた。そこで殘念なといふ心が起る。其心の強いものは怒る。癇癪筋を額に浮かせて。眼は血を解いたやうに赤くして。自分の計畫のわるかつたことは棚へ上げて。女房を叱る。子を叱る。何にも關係のない事にまで當りちらしてプン〳〵する。君子は怒を移さずといふ戒のあるのはこゝの事である。怒るべき理由のない處へまで持つて行つて怒る。かういふ時分に其人に依頼事でもあるものは。一寸見合せねば兎でも鼻呼吸が荒くて寄付かれない。それから今一つは泣く奴である。これは他人には迷惑はかけぬが。唯一人で愚痴を並べて泣いてをる。女の腐つたやうな人間といふのはこれである。あれを何故あの様にしたであらうか。どういふわしは馬鹿な事をしたらうか。何でこんなに

なつたかしらんと。朝から晩まで愚痴ばかりこぼしてをつて。さてこれからどうせうかといふことは餘り考へぬ。そこで梁往生土左衛門。鐵道往生などゝいふ自殺をすることゝなる。一昨三十四年度の自殺者の總數が。日本に於ては八千五百七十九人ある。其中此愚痴から自殺したものと見へるのが三千七百人。即四割以上はそれである。其他は精神錯亂。又は原因不詳のものゝみである。死んで花の咲くものではあるまいに。愚痴のためにかういふ最後を遂げるに至つては。實に哀れなものではないか。

かくの如く順逆二境に於て迷うことのないやうには如何にしたならはよいであらうかといふに。道しるべの立石がないからである。大きな道をとつとゝ歩行いて行過ぎやうとしたとき。どつこい此處に何やらあるぞ。成程道しるべの立石が。いやこれから先へは行か

れぬわいと控目になる。道は迷うたり日は暮れたり。どちらへ行つたらよからうかと思案に暮れてをるとき。左は何々街道。右は何々道と。立石が目についたら。決して溪川にはまつたり。深山に迷入つたりする氣遣はない。之を處世の標準といふのである。

○處世の標準

處世の標準。卽ち道しるべの立石とすべきものは。如何なるものであらうか。

前回に於て話した通り。人間の世に處する有樣が順逆の二つに分たるゝことであるが。順境に於ては調子に乘つて道を忘れ。逆境には自暴自棄に陷つて。おとなしく死ぬるか暴れて死ぬるかの不幸に沈む。此時に當りて最も必要なるものは標準である。標準とはメヤスである。度である。量である。衡である。此布切は何尺あるであらうか。此米は何升あるであらうか。又此炭は何斤あるであらうかと疑のあるときには。度や衡やを用ゐて其長さをはかり。其升目をはかり。其目方をはかる。イヤこれでは大分升目が多うすぎるとか。イヤこれでは少し目方が足らぬとか。是非共度量衡が必要であらう。卽ち度量衡は物品の過不及をためすメヤスである。世の中に此メヤスがなかつたならば。物の取引に大變な差支を生ずる。少くやればよいところへ多くやつたり。多くやらねばならぬところへ少くやつたりする。商賣でもして居る人は。常に人から不足を受ける。不足を受けねば損をする。サ世の中に度量衡の必要なることは解つたであらう。

然るに度量衡は有形のものをはかるメヤスとはなるけれども。無形のものをはかるメヤスにはならない。卽ち米や炭の過不及をはか

るには適當であるけれども。精神の過不及をはかることは出來ない
我々は有形の物品のメヤスを定めることの必要なる如く。精神のメ
ヤスを定めねば。人生の旅路を恙なく渡ることが出來ないことを知
らねばならぬ。前に話した通り。自分の氣に適したときは調子に乘
つて失敗をなし。又自分の氣に逆ふときは無暗に後しざりをして失
敗をなす。此時に當りて標準となるものがあつて。それでは行き過
ぎドやぞよと敎へてくれ。それでは足らぬ。も少し奮發せよと示し
てくれるならば。どの位安心な世渡りをすることが出來るであらう
か。其メヤスとなるものは。度にあらず量にあらず。乃至衡にあら
ず。佛陀である。嬉いことがあるときには。佛陀ならば如何せらる
ゝであらうかとハカリにかけて見る。悲しいことがあるときには。
佛陀ならば如何せらるゝであらうかと物尺にかけて見る。腹の立つ

とき畏ろしいとき。凡そこれは如何と。疑のあるときは必ず一度佛
陀の度量衡にかけて見る。イヤ〳〵此處は怒る塲合でない。諦らめ
ねばならぬところであると。切盛をし。イヤ〳〵此は悲む塲合でな
い。寧ろ奮發せねばならぬところであると合點が出來るのである。
此の如くにして世に處するときは。順境であるからとて。調子に乘
るといふ樣な事もなく。逆境であるからとて。ヤケを起したり悲ん
だりする樣な事もなく。板子一枚下は地獄と知れは。脂を流した樣
な春の海にも油斷せず。天命を知り宿世の應報を知れは。青海原の
眞中で難船しても苦くない。何ぞ況や。膝から上へは上げられぬ程
の小事故の爲めに靑筋を浮かしたり。涙を出したりすることの。甚
だ愚かな事であるといふ事が了解出來る。
成程御尤ではありますが。我々の標準は佛陀であることは少々合

點が參りかねます。人間の中でもゑらひ人もあるから。それを標準としても。よかりさうなもので御座りませうといふ人があるかも知れぬが。さうでない。度量衡は正確なものでなくてはならぬ。元來度量衡は一定の法則があつて。何人と雖も勝手に製造することを許されぬ。先づ物尺を造らうとすれば。原器といふものを標準とせねはならぬ。それはどういふものかといふに。白金とイリヂユームといふ二つの金を錬合して。作つた棒で。是は日本に唯一本しかない農商務大臣が保管してをる。此棒はギザ〳〵があつて。其長さの三十三分の十を一尺と定められるのである。又秤の原器は之も同ど金で作つた分銅で。此分銅の四分の十五だけの目方をは一貫と定めたものである。又一升桝の標準は。四寸九分四方で。深さが二寸七分と極つて居る。即ち桝の原器ともいふべきは物尺の寸法である。此

法則によつて造つたる度量衡でなくては間違つたメヤスである。吾人精神の標準を佛陀に求めずして。人間並のものに求めるものは勝手造りの度量衡で。物品を計らんとするものである。如何に巧みに出來て居つても。勝手造りのものは動もすれば間違ひがある。佛陀は吾々の度量衡である。此度量衡は勝手造りのものでない。此度量衡の造られたるには。元器の法則によつて造られたのである。佛陀の元器とは何ぞ。曰て六度の修行である。六度修行とは布施。持戒。忍辱。精進。禪定。智慧である。此六種の元器に照らして造られたるが。吾人精神の標準となる佛陀であるから。どうか各方は。米や炭をはかりにかける必要を知つて居る以上は。日々夜々の心の目方を常に佛陀のハカリにかけて。世渡りをしてもらひたいことである

○眞正の至誠

物品を計る標準は度量衡にして。精神の標準は佛陀なりといふこと。及び度量衡の標準とするに足る所以は。原器の法則によりて製造せられたるものなるが故である。佛陀の原器は六度滿行である。佛陀は此六度の原器によりて正覺をとれるものであるから。我等の精神的標準とするに無上の價値があるといふことは。前回に說いておいた。

さて度量衡は。原器の法則によりて造られたるものであるから。其特色といふべきところは正直である。俗諺に何所の桝も一升といふことがある。いかにも何所の桝も一升でなくてはならぬ。東京の物尺も臺灣の物尺も。北海道の秤も大阪の秤も。一尺は一尺。一斤は一斤。少しも變りのある筈はない。佛陀の特色も亦正直である。故に佛陀は正直の大地盤を踏締めて。悲智圓滿の相を顯はして御座るものである。我等精神の標準とするところは。此正直である誠である。

直卽ち誠は佛陀の立脚地である。圓覺經に曰く「十方如來同一道故出離生死皆以直心」と又維摩經には「直心是菩薩淨土」と說いてある。故に佛陀は正直の大地盤を踏締めて。悲智圓滿の相を顯はして御座るものである。我等精神の標準とするところは。此正直である誠である。

眼を放つて世の中を見るに。此度量衡に叶うてをるものが甚だ尠い。手紙の遣取りも碌々出來ぬ樣な無學なものが。口髯位生やして學者顏をしてをるではないか。根座の下まで借錢の抵當に入れて居りながら。金側時計をきらめかして居るではないか。三平二滿の醜女が。小野小町顏をせうとて磨き立てるやら。丁稚が番頭顏をせうとて。骨を折る浮世ではないか。直心は菩薩の淨土であると共に不正直は此世ながらの地獄である。世の中の苦勞の大部分は。正直の

反對即ち不正直の心から生れ出るものではあるまいか。貧乏人は貧乏人らしくして暮せば苦勞もあるまいに。ならぬ算段して迄も人目を裝ふものであるから。四苦八苦の苦もある。愚かなものは愚か相應に世渡りして居ればよいに。知つた顏して胸を痛める。實に直心は菩薩の淨土である。正直ほどの氣樂なことはない。即ち標準に當て箝めて心を正うせば氣樂な日暮しをすることが出來る。標準に箝らぬ日暮しをすれば苦勞をせねばならぬ。として見れば常に精神に物尺を離さぬ樣。正直な世渡りが其身々々の仕合せである。

○眞正の力

生存競爭といひ。優勝劣敗といふ。この言葉はダーウインの進化學の世に持囃さるゝと共に能く人の口にする言葉となつたが。生存競爭とは社會の有樣であつて。優勝劣敗とは其結果である。

生存競爭の世に處して優者とならんとするには。如何なる資格を要するか。曰く力あるを要す。此世の中は力のあるものゝ仕て取る世である。力のあるもの之を優者といひ。力のないもの之を劣者といふのである。商業に成功するものは力のあるものに限るのである。工業に成功するものの亦力あるものに限るのである。學校の試驗にも運動會にも。力のないものは何時でも劣者である。

然らば所謂力とは何であるかといふ問題が起る。力とは仆れても直に起上ることを得る勢即ち力である。夕暮時に町を步行して居ると。小供が澤山集つて遊んでをる。或は鬼ごつこをして居るもあれば。或は軍事をして居るのもある。中に小い子があつて。走つて居つてツイ仆れる。仆れたならすぐ起上れぱよさそうなものなれども顏だけ上げて泣いて居る。側に見て居る友達も起てやらうともせず

して皆ンナ見て居る。通行するものが氣の毒がつて起してやるか。又は母親でも泣聲聞付けて起しに來ねば。獨りでは得起きぬ。これは力のないものゝ有樣である。十にも十二三にもなれば。仆れたらすぐ起上る。徒らに泣いては居らぬ。これは力あるものゝ有樣である。此頃は早や麥の芽が能く出て居るが。あの麥といふものは勢のよいもので。田舍では能く芝居小屋などを麥田の中に作つて。秋芝居をやる。芝居の濟んだ後で。蹈たゝかれた麥が。そろ〳〵頭を上げて太くなる。吾々はこれではつまるまいと百姓に聞くと。いや麥は蹈たゝかれて太くなつたのが。反つてよろしいといふ。力あるものゝ態度はすべて此の如しである。

力にもいろ〳〵ある。智識も力である財産も力である。名譽も。地位も。權勢も。國家も。社會も。腕力も。男も女も力である。併しながら今予がいふところの力とは此の如き力ではない。何となればこれらの力は皆人の力である。人の力は限りがある。此生存競爭場裡に眞正の優者とならんとするには。如此限りある力に賴みては駄目である。限りなき力即ち最も強き力に依りて。我々は此世に處して行かねばならぬ。

前回に於て。佛陀は正直なりといふ話をしておいた。佛陀は我等の力である。正直は我々の最も強き力である。世に何が強いといふても。此佛陀を信ずるものゝ力。正直であるところの力は。世のあらゆる力の中最も強き力である。何となれば正直の心は佛の心に依るの力であるからである。佛は吾等の顧問である。此上もない味方である。筆の軸一本でも眞直ぐに立つれば何貫目の荷物を支ふるに足るではないか。吾等佛心即ち眞直くなる心を以てせば。世の重荷

は幾ら重からうとも。能く支ふるに足るのである。たとひ一たび失敗するも仆れて直ぐ起上がることの出來る力である。各は此力を常に頭に戴かねはならぬ。

京の北に畑の姥といふものがある。いつでも重荷を頭に頂いて京の町へ出る。試に歩行にくいであらうと問へは。頭をふつて曰く。これがないと反つて歩行きにくい。首がすわらぬからといふ。我々は佛陀の心を以て常に頭に頂き。晝夜正直の重りを以て。首を据へて世を渡つたならは。世の中は生存競爭如何にはげしくとも。決して渡り難いものではない。

○煩悶なき生活

お互に此世を渡つて行くに。ざめの夢にまで苦い思ひをして暮さうよりは。成らうことなら氣樂な日暮しをしたいものではないか。此氣樂な日暮しといふこと。これは卽ち煩悶なき生活である。此煩悶なき生活は十人が十人希望をするに違ひはない。然るに十人が十人煩悶なき生活をなし得ずして。反つて夜々日々煩悶を絶つこと能はずして。戰々競々として苦んで居るもの〻多いは。果して如何なる理由によるものであらうか各方は工場に於ても心長閑に役業に就事して居るか。監房に於ても氣樂に起臥して居るか。中には修養のある人は身は監獄に在り乍ら心は極樂に在るの愉快を得て。日暮し〻て居る人もあらう。

今日は所謂煩悶なき生活を爲し得るの方法を話すであらう。維摩經に曰く。「直心は是れ菩薩の淨土也」と。予は各方や我等が煩悶なき生活を爲し得るの方法は。金錢に求むべきにも非ず。名譽に求むべきものにも非ず。唯此佛陀の金言「直心は是れ菩薩の淨土也」といふ

意義によるの外はあるまいと思ふのである。直心とは正直の心といふ事で。正直の心は菩薩の淨土である。心が正直にさへあるならばたとひ人間の境界にありといへども。實は菩薩の淨土である。此正直の心とは秘密なき事である。人間も秘密の少くなるほど快いものはない。人物の高下は唯秘密の多いと少いとにあるといふもよいであらう。凡そ人をして苦ましむることも澤山あるが。秘密ほど人をして苦ましむるものはないでは無いか。經濟上にも秘密があるで人にかくさねばならぬ。家庭の上にも秘密があるので女房子にも打明けられぬ事がある。社交の上にも秘密があるので朋友知人にかくさねばならぬことがある。出ても入つても秘密だらけで。唯の一時も心をゆるすことが出來ぬ。氣を配らねばならぬといふ樣な生活ほど苦いものはあるまい。窃盜なり詐欺なり。一の犯罪をなしたものが。

身體は料理屋の二階で藝者の膝を枕にして眠つて居りながらも。刑事巡査に蹈込まれた夢を見て。吃驚して眼を醒して見れば。脇の下に冷汗が出て居るといふ樣な事では。廣い世界に身の置處もないはど。氣苦勞をせねばならぬ道理である。千圓の財産のあるものが壹萬圓もある風をせうとするから。心配もせねばならぬのである。中學校を卒業した顏をせうとすればこそ。苦勞もあるのである。反則の秘密があればこそ徒黨を組んで。スッタモンダと氣苦勞も出來るのである。此等の煩悶を排除して。氣樂な日暮しをせうとするには秘密のない樣にするの外はないのである。秘密のないといふことが卽ち公明正大なる日暮である。公の字は八の字の下に片假名のムの字を書いた文字で。八の字はこれは背くといふ意で。左の一畫と右の一畫と背合せになつて居る。ボウフリ見た

様なこうハ子タ所が。頭をつき合せて反對の意を示して居る。下のムの字は私といふ字のツクリで。私即陰事といふ意である。これを合せて私に背くといふが公の字である。即ちオホヤケといふ字である。我身勝手なる秘密がないといふが公の字の意味である。次に明の字は明治の明の字で。日といふ字を左において。月といふ字を右においた字で。これはどアキラカなる意味の字はない。そこでたとひ神様や佛様の御目の前でも。少しも恥かしからぬ様な日暮をするといふ事が。公明正大の日暮しである。秘密のない日暮である。維摩經に所謂「直心は是れ菩薩の淨土也」といふてあるのは。此の如き秘密のない生活を爲すものは。淨土に居る人であるといふことである。お互に煩悶は大に嫌であるなものは貧乏のまゝを打明けて日暮をしたいものである。馬鹿なものは馬鹿なまゝを打明けて進みたいものである。煙草の烟を袖でかくす様な秘密なく。看守の眼を偸んで御馳走の振舞をするの秘密なく。所謂公明正大。誰に見られても少しも恥かしくはない生活が出來る様になれば菩薩の淨土也で。監獄に居つても心に苦みなく。煩悶へなく暮す事が出來るのである。

以上は今迄はなし來つた。宗教と人生との關係に就ての續きの話である。即ち佛陀は誠である。此誠なる佛陀を標準として日暮するものには知らず〳〵此則に叶ふ様な煩悶なき生活に入る事が出來るのであるから。前後思合せて考へてもらひたい。

○常住の至誠

先日以來誠といふことに就て席を重ねて御話をした。第一此迷ひ易ひ世に處するには標準即ちメヤスがなくてはならぬ。此メヤスは

佛陀である。佛陀とは誠である。誠は力である。力にもいろ〳〵あるが誠は眞正の力である。此力によりて我等はたとひ倒るゝ事あるも。直に起上ることが出來るといふことを話した。次に誠は力である。

話し。尙進んで誠即ち秘密なき生活は。氣樂に世に處して行く秘傳である。人に苦勞の多いのは兎角誠が欠けて居るからである。秘密が多いからである。どふか秘密なき生活。公明正大なる生活の出來る樣に心掛けねばならぬといふことをお話した次第である。此樣にヒナクドク話しておいたからにはなるほど人は誠でなくてはならぬといふ事丈は。大抵合點の出來たことゝ思ふのである。

そこで今日は一步進んで此誠といふものは。それほど大切なるものであるからには。永續的のものでなくてはならぬといふ話をせうと思ふのである。どんな人間でも一年三百六十五日の間には。たまには誠心も出るのである。けれどもたまに出る位では甚だ效力の薄いものである。其日々々の出來心では不足である。毎日々々誠でなければならぬ。一年も二年も立派な心得を持ちつゞけながら。たつた殘飯一握で千日の功を一時に滅ぼす樣になつては。甚だ殘念ではないか。此の如く時には誠心も出るが。どうもつまらぬ心が多く出て致方がないといふのは。未だ佛陀の心を以て心とせぬからである。信心の得られたものは。たとひ時によりてつまらぬ心が起るとも。それは恰も月前の雲の如くで。信心の風のはたらきで直に散るべき筈のものである。故に佛陀の心に住するものは光風霽月洒々洛々。いふにいはれぬ味があるのである。吾々は力の弱いものである。力が弱いから自分の我慢で誠にならうといふことは甚だ難い。佛陀から惠まるゝ誠によらねば。此信臨終ま

で徹るといふ金剛堅固は得られぬものである。

佛教に眞如といふ語がある。此を學問的に解釋すれば諸法の本体であるとか。萬法の根源であるとか。ナト六ケ敷事になるのである が。之を倫理的に道德的に解釋すれば。誰にも分ることであらう。眞如の眞は眞實。如は如常。眞實とはマコトで。如常とは常住不斷變りのないことである。眞實とは人の右の手で。如常とは左の手である。マコトといふばかりでは未た不具である。其マコトが時間的にツヾキ。空間的にカワラヌ樣にありてこそ。理想的人格といふものが始めてあらはるゝものである。十年昔も十年後も。生れ故郷でも知らぬ他國でも。相變らず眞實でなくてはならぬ。モ一ツ皮肉に言へば戒護者の前でも監房の中でも。晝でも夜でも同ト樣に。謹愼の心を忘れてはならぬのである。

鳩翁道話の中にかういふ話が書いてあつた。昔元龜天正の頃。卽ち德川幕府の成立つ少し前。彼方にも戰爭此方にも爭亂。日本國中鼎の沸くが如く騷動して居たときの事。盜賊四方に起りて人民安き心もせず暮して居た。或夜二三人の盜賊が此處ぞと目星をつけて一軒の內を覗うた。窓の穴から中の樣子を見ればまたねて居らぬ。爐のほとりに一人の年若い婦人がかしこまつて。鍋で粥を煮て居る。其婦人が粥の煮へたか煮へぬかを見るのに。鍋の蓋のうらにすくひ上げ。杓子の背でつぶして見て居る。とこゝまで私は讀んで來て思はず容を正した。恥かしいことだが若しこれが私であつたならば。夜は深し人は居らず。さうまで丁寧にはせぬに違ひないのである。人は行儀が大事である。又人の居らぬ處の行儀が尙更大事である。語に曰く。「獨行影に恥ぢず深夜衾に恥ぢずと」。私共の理想は影に恥

づるでもなし衾に耻づるでもないいものである。さて右の有様を見て居つた所の盜賊は。流石に感服して仕舞つた。イヤ〳〵コンナ女の處へ。盜人に這入るのは遠慮しておかう。誠に吾々は耻かしい事であると。此を緣として終に改心の緒を開いたといふ話。これでこそ嘗て話した如く。佛陀を標準として日暮しする身の上である。それ佛陀の光明は。明闇を問はず。内外を論ぜず。盡十方無碍光であり。山に登らば山に佛陀の光明が輝いて居る。希くは此光明中に生活するの人となられよ。

○與へられ而して保持すべきもの

上來マコトといふことに就て說來つたことであるが。これは所謂順逆二境に於て決して迷を起さゞるための標準。卽ち佛陀の面影である。然るに嘗て宗教の要領を說くに當り。佛教といはず基督教といはず。將又儒教といはず。苟も宗教といふものゝ本領は仁であるとか博愛であるとか慈悲であるとか。一言にして云はゞナサケであるといふ話をしたことである。されば吾々の宗教的生活は慈悲といふ事を以て其本領とせねばならぬものであつて。誠といふが如きは敢て宗教の要領ではあるまいといふが如き考を。起す人がありはせぬかと竊かに憂ふる處である。實に今迄話來つたところの誠といふことは。慈悲といふ事が佛陀の面影であると共に。吾人の忘却すべからざる佛陀の面影である。便利上先づ誠といふに就ての話をしたことがあるが。彼の誠といふことを忘れてならぬと共に。又慈悲といふことを忘れてはならぬことである。誠は佛陀の右ならば慈悲は佛陀の左である。火は熱いものであると共に。又光あるものであ

佛陀は誠であるといふのは。火は熱いものであるといふのが如きものである。世に熱誠といふ語があるが誠といふ誠に。冷かなる誠のあるべきものではないが。佛陀の誠は實に燃ゆるが如き誠である。此燃ゆるが如き誠を有せる佛陀は。三世十方至らぬ隈なき慈悲の光を有し玉ふのである。觀無量壽經には。「佛心者大慈悲是」と說き。歌に「ほとけとは何をいはまの苦むしろ。唯慈悲心にしくものぞなき」。「哀れみを物に施す心より。外にはとけの心やはある」。といふが如き。佛の慈悲であることを能く言ひあらはしたものではないか。

されば吾人宗教的生活を爲さんとするものは。常に此佛陀の心即ち慈悲をば。忘れざる樣注意せねばならぬ。然るに或人は思へらく慈悲は貴いものである。貴いには違ひないが。此慈悲なるものは與へらるべきものである。向ふの人から貰うべきものである。故に此方では別段慈悲を心がけずとも。を與へられて。罪業の深重なるにも拘らず。救はるべきものである國民としては上御一人の御慈悲を被りて。天下の法網を破りながら御手厚い待遇を受けて居る。哀々たる父母。我を生んで劬勞す。産聲擧げたる其時より今日に至るまで。親の身になりて見れば何時まで三兒の樣に思ふて世話をして下さる。貧乏すれば富みたる人の慈悲に預り。愚かなものは賢い人の慈悲に預る。慈悲はいつでも他より與へらるべきものであるから。我々はどうぞ慈悲の我身に與へらるゝ樣。待つて居りさへすればよいのである。自分に慈悲に心がけるには及ばぬことであると。此樣に思うて居る人もある。これは一を知りて二を知らぬものといふべきで。抑々慈悲は與へらるべき

ものではあるけれども。與へられたる以上は之を保持して行く事を忘れてはならぬものである。佛陀より慈悲を與へられたる信者は。佛陀の心を以て心とし。佛陀の慈悲を決して忘れてはならぬ。御天子様より慈悲を與へられたる國民は。御天子様の心を以て心とし。決して上御一人の御心を忘却してはならぬ。父母の慈悲は子として一日も忘れてはならぬところである。此等の慈悲の與へられたるを決して忘却せぬ様にするといふが。即ち保持するのである。與へられたる慈悲を保持するときは。佛陀に對しては信者同行である。御天子様に對しては忠臣である。親に對しては孝子である。多くの人は慈悲の與へらるべき所以を知りて。而かも保持すべき所以を知らぬ。かるが故に佛陀は常に大慈悲の光明を以て照護し玉ふにも拘らず。多くの信者は佛陀の心に背いて居る。上御一人は晝夜國民のために慈悲の御心を擔き玉ふにも拘らず。不忠なる國民が出來る。子は親を忘るゝ時はあつても。親は子を忘れる暇のないほど。慈悲心を以て包まれながら恩を讎でかへす不孝の子が多いのは。如何に悲むべき有様ではないか。

どうか佛陀の心を以て心とするの宗教的生活を爲すものは。此慈悲心を保持すること即ち慈悲を忘れぬ様に注意して。起居動作をせねばならぬと決心してもらひたい。

○笑ふのみに非ず時に怒ることあり

前回に於て慈悲は與へらるゝものにして。且つ保持すべきものであるといふことを話したことであるが。今回より一歩を進めて其所謂慈悲を保持して行くには。如何なる心得を爲して居りてよきものかといふことに就て話すことゝする。

抑々慈悲とはナサケといふことで。至極柔かなるものである。慈悲のない人は骨ばかりの人である。人には必ず骨のあると共に血もなくてはならぬ。涙もなくてはならぬ。ナサケ知らずの人が骨ばかりの人であるならば。慈悲のある人は血あり涙あるの人である。ぞうしても慈悲は柔かなるものである。然らば慈悲は柔かなばかりであるかといふに。強ちさうばかりではない。時には硬いことをもある。阿彌陀様や觀音様の御姿を拜めば。如何にも柔かで慈悲の御相に見受けられるが。彼の恐ろし相な姿をして御座る不動明王も亦慈悲である。慈悲も時に怒ることがある。何時も笑ふてばかり居るものではないのである。

昔の川柳に「勘當の子より炬燵の親が痩せ」といふのがある。これはどういふことであるかといふに三人五人の兄弟の中で。一番心掛のわるい子供がある。一度や二度の異見ではない。親類や他人の厄介になつてまで。度々異見もくしたけれども。馬の耳に風。一向性根がなはらぬ。そこで親がお前の様なものは子でもない親でもない勘當するから出て行けと。涙を飲むで申渡す。すると今の極道息子また迷の夢がさめぬから鼻の先で返事をして。ヘンコツチも丁度都合がよいわと。産聲上げた我家を。足を蹴立てゝ飛んで出る。サアこれからは自由がきくと。あちらの友達の所では博奕を打ち。食ひたいものは食ひ放題。飲みたいものは食み放題。生憎寒中でも單物といふ修行もせねはならぬけれども。若健氣の最中たで。勘當受けた身ながらも。反つて身體の目方は殖へて居る。さて我家の父親。母親ドや。厄介な道樂息子を追拂うて。これで先づ々々安心ドやと。口には言へど心には。鳥の鳴か

ぬ日はありても。我子を思うて泣かぬ日はない。勘當したとて棄てたドやない。燒野の雉子夜の鶴。生きとし生きるもの何れか子を思はぬものがあらう。況や萬物の靈長たる人間が。何ぼ極道な子なればとて。追出して喜んで居るものゝあらう筈はない。「渡さぬは渡さうための橋普請」。かうもしたなら性根が直らうかと。涙を呑むでの勘當ドや。炬燵に當つて眼鏡越しで新聞を讀む。讀む新聞の其中にも。若しや我子の不仕鱈が出てはゐるまいか。盜賊をしたといふ事はあるまいか。監獄へ這入つたといふことはあるまいか。見るもの聞くもの悪く我子を思ふ種となる。炬燵かゝへて温かさうにして居つても心の中には寒い風が吹いて居る。「勘當の子より炬燵の親が痩せ」とは卽ち此心中を言顯はしたものである。慈悲の心のありたけが。時には佛ともなり又鬼ともなるのである。これは親の慈悲にとよせての話であるが。御天子樣の御慈悲とても其通り。文王一たび怒つて天下を安んず。日淸戰爭のあつたのも。慾や我慢で起るのでは決してない。東洋の平和のため。國民が可愛がため。泣く〳〵戰爭は遊ばさるゝのである。

然れば則ち我々。親から慈悲を與へられ。御天子樣から可愛がられ。佛樣から慈悲を頂いて居るものは。能く〳〵此邊の道理を辨へたとひ眼に角立てゝ呵らるゝ事のあらうとも。決して恨むどころではない。ます〳〵其深重なる御慈悲を感ド。いよ〳〵與へられたる御慈悲を忘れぬ樣。保ちもつ樣。心がけねば相濟まぬ事である。

○君の恩

慈悲は與へらるゝものなれども。與へられたるのみにては相濟まぬものである。且又慈悲は常に笑ふのみにはあらずして。時々怒る

こともある。阿彌陀如來や觀音菩薩の御姿を拜すれば。如何にも御慈悲の相が溢れてある。けれども阿彌陀如來や觀音菩薩に御慈悲の溢れてあることを知りて。而かも不動明王にも御慈悲の溢るゝほどあることを知りて居るものが尠ひ。不動明王は瞋恚の相を現して御座る。此瞋恚の相は內に溢るゝ慈悲があつて。假りにあの樣な姿を現して居られるものである。阿彌陀如來や觀音菩薩には慈悲があるが。不動明王には慈悲がないと思ふものは。抱いて逃げる母親には慈悲があるが。拳を振上げて折檻する父親には慈悲がないと思ふ子供と同樣である。慈悲あるものは時には佛となり。時には鬼となり此手で行かねば彼手で行かせうと手を換へ品を換へて。善い方へ方へと導いて下さるゝので。此を善巧方便といふ事である。此の如くやるせない御慈悲は。與へらるゝのみにはあらずして。

保持して行かねば相濟まぬ。父母の慈悲を保持するものは孝子である。君の慈悲を保持するものは忠臣である。佛陀の慈悲を保持するものは信者である。保持するとは如何することであるか。即ち其人の心を以て心とすることである。

今天皇陛下の慈悲に就て申さば。普天の下王土にあらざるはなく卒土の濱王臣にあらざるはなし。北は千島のはてより南は臺灣のはてに到るまで。四千五百萬の人民は。皆赤子の如く御いつくしみ遊ばさるゝ。神武天皇このかた二千五百有餘年。百二十一の御歷代。皆此御心を以て吾々の先祖代々御慈悲の露に沾うて來たものである中に於ても第十六代の仁德天皇は。御自分の宮室は雨の漏るのも御忍びあらせられ。民の富めるは卽ち朕が富である。民の貧きは卽ち朕の貧きわけであると。御慈悲厚き御思召を垂れさせられ。「高き屋

にのぼりて見れば煙たつ。民のかまどはにぎはひにけり」といふ。名高き御製を遊ばさせられたことである。又第六十代の醍醐天皇は寒氣嚴敷冬の夜。此樣に寒いのに多くの人民の中には。薄着して凍へて居るものもあらう。誠にふびんの事よと思召して。夜中御衣を脫がせられたといふことも承りて居ることである。殊に今上陛下に於かせられては。その仁天の如く覆はざるところもない。嘗ての御製に。「古の文見る度におもふかな。おのが治むる國はいかにと」と。御意遊ばさせられたと申すことである。よいにつけわるいにつけ。唯の一寸の間も人民を忘れさせ玉ふことなく。日清戰爭の當時には梅干を御召上り遊して。勿体なくも玉の御涙をおとさせ給ふたと承つて居る。又此頃の日露戰爭に就ては。人民の忠義を思召し。一汁一菜の御辛抱。我々は食はずに居つても。まだ比例がとれぬ次第で

ある。昔夏の禹王は。出で、罪人を見て。「堯舜の民は堯舜の心を以て心とせり。寡人君となつて百姓各其心を以て心となす。寡人之を痛む」と御歎きなされたとやら。予は支那の歷史を讀んで此に至る毎に。明治天皇陛下の大御心を難有思はぬことはない。此君ありて此臣あり。宜なり日本の臣民其忠勇心に富むこと恐くは世界第一。陛下の御爲といふことならば一令の下に。死を鴻毛の輕きに比して進むものあつて退くものはない。先日老朽の滊船五艘を沈めて旅順港を閉鎖せんとせしとき。司令官が決死の勇士七十七人を選ぶに當り。吾先にと募りに應ぜんものが二千人に達したといふ事である。生命をないものにして敵彈雨の如く降る眞中に。悠々として騷がず船を沈めに行くときに當り。私こそ死にませうと他人を推分けて出るものが二千人とは。何といふ勇ましいことであらうか。これらの

士卒は頭のギリ〳〵から足の爪先に至るまで。一分ためしに刻んで見ても。忠義の外には何にもない。女房が可愛子が可愛は平常の事である。一朝事あるに當つては忠より外はないのである。此忠は名譽が欲うて出るのでもない。金鵄勳章が貰ひたさに出るのでもない唯御天子樣のためといふより外はないのである。そのこゝに至るは陛下の仁德一天四海に充滿して居るがためではないか。各方は陛下の赤子である。然るに今は一旦の心得違よりして不忠の臣となつて居るのである。今日此頃の形勢を聞いては。如何に各方と雖も。否一旦心得違をした各方であるから。尙更ちッとして居られぬ氣がするであらう。獻金をしたいといふ人もあり。夜の目も寢られぬから夜業をさせてもらひたいといふ人もある。暫く賞表を預つておいてもらひたいといふ人もある。然しながら目下の處。其願を容れられぬ模樣であるから。各方は身は監獄に在りと雖も。心は滿洲の野に戰うて居る積りで。身體と精神の修養に油斷せぬやうにしてもらひたいことである。此の如くにして上陛下の御慈悲を保持し。陛下の大御心を以て心とする忠良の民たるを得るであらう。

○親の恩

前回に於て國王の御恩といふことに就て述べたことであるが。國王の恩を述ぶると共に是非述べねはならぬものがある。それは外ではない。卽ち親の恩である。國王の恩が天ならは親の恩は地であらう。親の恩が左の翼なら君王の恩が右の翼である。天下君王の恩を知るもの何ぞ親の恩を知らぬものがあらうか。前々回に於ても親の恩に就ては少し話した事ではあるが。更に話しておくも決して過ぎたるものではあるまい。

我々が物心を覺へて小學校に通ふて居つたとき。修身書で學んだ中の重要なるものは。父の恩は山より高く母の恩は海より深しといふことであつた。ヒマヤラ山でも太平洋でも高いことは高いに違いない。深いことは深いに違いないが。併しながら高いにも限りがある。深いにも底がある。彼の父母の慈悲に至つては限りがないのである。父母恩重經といふ御經には。父母の恩の高大なる事を詳かに說いてあるが。讀んで見れば實に涙の溢るゝばかりである。そもそも母の胎内に宿りしより。赤兒としての襁褓の世話。十人並に生長しても親は尙小供の樣に思ふて心配して下さる。外典の語にも人の親となりては慈に止るといふてある。親は實に慈愛の塊である。

去年の冬。國へ歸つて大に感じた事の第一は。親の慈愛であつた神戸から。山陽鐵道の滊車に乘つて。乘合の中に年の若い奥さんが一人あつたが。これが二つばかりになる男の子を連れて居る。けれども不幸にして此母親は乳がないものと見へて。牛乳を硝子の罎に入れて。ゴムの管を附けて乳の代りに子供に飲ませて居る。ところがどうも寒い時候に冷たい牛乳を子供に飲ませることは出來ぬ。されはとて滊車の中ゝで火の氣もない。そこで母親が其硝子の罎に入れた冷たい牛乳を。自分の肌に入れて暖めて居るのを見て。私は眞に涙をこぼした。あの小い子の親の乳もないのに。みづ〳〵と肥りてにこ〳〵と笑つて居るのは皆これ親の慈愛の賜であると思へば自分が久し振に親の顏を見に歸つて居るのが。有難くて〳〵仕方がない樣になつた。それから備後の福山のステーションへ下りて見れば。六十一になる父親が眼鏡をかけて私を探して居る。イヤどうもあなたが出迎して下されうとは存じませんでしたといふまに。寺の

世話方などが來て終に車で寺へ送られた。前の車に乘つて御座る父親の後姿を見ながら行くに。幼い時からの父親の慈愛が自然に想出されて。佛樣の樣に思はれるのである。それから寺に着けば母親が門の前まで迎へに出て居られる。手を取られて車から下りれば。やれ〳〵無事で能く歸つてくれた。去年歸つた時よりは少し頰の邊に肉も付いた樣ぢや。無事な顏を見せてくれるが何よりの土產ぢやと。ソヲ湯に入れ。ソヲ衣服を着換へよと。三十にもなつて居るものをマルで小兒の樣にして吳れられる。親は子の顏を見て自分の老を忘れるものである。

「親思ふこゝろにまさるおやごゝろ。今日のおとづれ何ときくらん」。これは維新の學者吉田松陰先生の。國事犯のために死刑に處せられんとしたるときの辭世である。子として親を思ふさへいふにいはれぬ恩愛のあるものを。況や親の子を思ふことは子の親を思ふにまさつて居る。其親が可愛我子が國のためとはいひながら。死刑に遇ふて殺されたといふことを聞かれたならば果して如何樣に歎かれるであらうかといふ歌のこゝろである。實は子の親を思ふよりは親の子を思ふ心はすぐれて居る。子は親を忘れる時がある女房があれは女房を思ひ。子供があれは子供を思ひはするけれども。親の事を忘れて居る時がある。親は年をとるにつけます〳〵子を思ふ心が切になる。況や其子の不幸なる境遇に沈んで居るを見ては。片時も忘るゝ暇はないのである。

在監人へ來る書信は毎日五六十通。多い時には百通以上の事も度々あるか。それをは讀んで見るに凡そ三種に分類する事が出來る。一には交際的のもの。これは知人より挨拶をいふて來るので。貴兒

此節は御入監之由驚入候。申迄も無之候へども。獄則を守り健康に注意し。一日も早く御出監相成候様祈上候。文句に巧拙はあるが大抵定まつたものである。二には利害上の手紙。これは入監前の關係よりして金錢の取引。又は出獄後相共に何か一仕事爲さんがための手紙でつなぎをつけておくのである。此種の手紙の中には折角寄越されても。看讀不認可となるものが多い。三には親切よりの手紙である。親い朋友からのもあれば。親屬からのもある。或は入監後其土地の變遷した模樣を書添へたのもある。或は家に殘つて居るものゝ世話をして居ることを書いて。心配するなといふてあるものもあれば。心をこめて意見したのも來ても。交際的のものや利害的のものは少しも難有ないが。唯の一本でも此樣な親切なものが來れば。どんなにか其人は嬉しからうと察せられる。就中親からの手紙である。まわらぬ筆に親切のありたけが現はされないやうな書きぶりでも。一字一句に生命がこもつて居る。郵便賃は壹錢五厘か參錢かだが。此親切は千圓出しても萬圓出しても。他人からは買うことの出來ないものである。

それ親の慈悲は此の如し。然れども此親切のありたけを除けておいては相濟まぬ。慈悲は與へらるゝものにして。且つ之を保持せねばならぬものといふことは前に話しておいた。親としては此の如き慈愛のものである。子としては此慈悲を保ち持つといふことを決して忘れて相ならぬものであらう。

○佛の慈光

心地觀經の報恩品に。四恩といふことが說いてある事は各方も聞いたこともあらう。此四恩の中に國王の恩と父母の恩とは前に說いた

から。今日は其次の三寶の恩といふ事を話すであらう。三寶とは佛と法と僧との事であるが。就中佛寶が最も主要で法と僧とは佛によりて說かれ。佛によりて生ずるものであるから佛寶を說くときは。從つて他の二つの事は了解出來る筈である。

抑も佛とは如何なるものであるぞといふに。觀無量壽經には「佛心とは大慈悲是なり」と說かれ。又「ほとけとは何をいはまの苦むしろたゞ慈悲心にしくものぞなき」とも歌はれてある。佛は慈悲のかたまりであるといふよりは。慈悲のかたまりが佛であるといふ方が能く當るであらう。世の中に慈悲のあるものも隨分澤山あるが。その慈悲の發達進歩して極點に至れるものは。實に妙覺果滿の佛陀である。

この佛陀は常に慈悲の光明を放つて。吾等を照護し玉ふのである

が。各方は之を知つて居られないであろうと思ふ。先日も或人に此話をした時に。其人が不思議相な顏をして。それでも吾々は一向佛陀の慈悲の光明に照らされた事はありませぬ。御說の如く常に光明に照らさるゝものならば。少しは吾々にも分りさうなものであるといふた人がある。そこで拙者が其人に答へていふには。佛陀の光明は常に照し玉へども。恐らくは貴君は知らぬであらう。正信偈に「煩惱障眼雖不見大悲無倦常照我」と說いてあるのは卽ちそれで。お前は煩惱に眼を障へられて見ることが出來ないのである。恰も盲人は太陽をも見る能はざるが如くであると諭したことである。各方の中にも此樣な考を起す人が必ずあるであらうから。今少し委く之を話すことゝせう。

凡そ光明に二種ある。曰く色光。曰く心光。卽ちこれである。色

光とは所謂物質的光明である。心光とは所謂精神的光明である。其物質的光明といふのはランプの光りの如く。蠟燭の光りの如く。X光線の如く。ラヂユームの如く。日光の如き。卽ちこれである。これらの光りは光り其物が物質的であるがために。物質を照す力はあつても精神を照す力はない。X光線は骨の髓まで見透すもので。今度の戰爭などにも鐵砲玉の身體に留まつたのを拔出すに甚だ重寶であるさうである。又近頃發見されたところのラヂユームといふ礦物は。X光線の比でないほどの光力を有するものであるさうなが。而かも皆物質的光線であるから。精神的作用はない。精神的光明とはこゝろの光りである。故に其色は見ることが出來ぬ。太陽の光の如く赤色でもなければ。電氣や瓦斯の如く青くも白くもなく。無色無形であるが。而かも其光りは心の闇を照して到らぬ隈はない。彼の

智惠は光りではないか。彼の德は光明ではないか。世俗の諺に「親の威光は七光り」といふが。これは親の德の光りであらう。一天萬乘の御一人樣の御稜威の光は。世界萬國に輝くではないか。經に「光明遍照十方世界」と說かれてあることである。豈X光線やラヂユームの天にも貫き地にも透つてある比類であらうか。

それで佛の光明といふことは了解したが。その光明は佛を信ずるものにこそ被るもの。佛を信ぜないものには風馬牛である。何等の關係もないではないか。否そこが卽ち盲者は日光を見ずで。たゞ見へないはかりであつて。照さないのでは決してない。佛陀慈眼の光明は佛を信ぜないものにまでも照されてをる。各方が明信佛智と心眼の開いたとき。始めて之を感ずるに至るのである。夢中夢を知

るものなく迷中迷を知らざるは致方もなき事ではあるが。さりとて勿体ない事ではあるまいか。古人此趣を歌ふて曰く。「さめた時初めて来たと思ふなよ。宵から守る母の手まくら」と。各方は無限の妙趣此三十一文字の中にこもれるを見るであらう。初更を告ぐる鐘の音に。フト驚いて眼をさませば。哀々たる慈母我を抱いて床にあり幼い小供の心には。今自分が眼をさましたからお母さんが来てくれたと思はうが。何ぞ知らん宵から守る母の手まくら。スヤ〳〵眠る間にも片時の油断あらばこそ。此親心の有りがたさを知ると知らぬは小供の方。知ると知らぬに拘らず。守りづめにして下さるは親の方である。あゝ我等何の幸ぞ。無始曠劫以來。生死海中に沈淪せる其の間にも。慈悲極まりなき佛陀は。照熟の光明を浴びせかけて。機縁純熟の時を待ち。終に攝取の光明に抱取つて下さるのである。

見よ野にも光明あり。山にも光明あり。朝な〳〵光明に射られて起き。夕な〳〵光明に攝められて臥す。身は貧く且つ賤しけれども。吾等の夢の常に圓かなるを得るは。豈光明の懐住ひなるによりてでなからうか。此に於てか御冥見に耻づるといふ心がけが起るものである。

○相濟まぬといふ觀念

世に制裁といふものがあつて。吾等の行動を我儘ならさらしむることである。小人のならひとして若し制裁がなかつたならば如何なる我儘も試みる事であらふ。御覽なさい。法律の制裁は何千何百條といふ澤山あり。之を執行するところの官吏も少からぬのであるが尚且つ犯罪者は常に數萬を下らぬではないか。之れが無制裁であつた時には。果して如何なる現象を見るであらうか。社會の制裁であ

るとか。因果の制裁であるとか。いろ〳〵の制裁がある事ながら。吾々の常にいふところの佛の御冥見に耻づるといふことは。これらの制裁とは大に趣を異にして。罰せらるゝを喜んで善行を爲すとかいふわけではない。其動機は實に賞罰已上である。丁度忠臣の君に事ふるが如く。孝子の親に事ふるが如き心持で。賞罰利害に一點の私心のあるわけでない。旅順閉塞に討死をした中佐廣瀬武夫氏の如き。名譽や金錢に心を措いて居る樣ではどうしてあの樣な壯烈な事が出來やうか。一片の丹心唯忠君愛國より外にはなかつたのである。賤の伏屋に細き煙を立てながら。纖弱い女の手一つで十年も十五年も病床に呻吟して居る父親に進んでは湯藥の勞を採り。退いてはマツチの箱貼りをして米代を作るが如き。孝子孝女の美談は諸所に聞くところであるが。賞めても

らひたさで出來やうか。叱られるのが苦び位で出來やうか。唯大恩受けた親は大切にかけねばならぬといふ一片可憐の孝心より外はないのである。今御冥見に耻入るといふ心もその如くで。五道六道迷ひに迷うたる我々を必ず救はんと盟ひ玉ひたる大慈大悲の佛陀は。吾等の少しも其慈悲を知らぬ間も。尚且つ照熟の光明を以て照し玉ふたのであり。又一たび佛陀の光明に目が開いた上は攝取光中相變らずの慈悲を垂れ玉ひ。泣くも笑ふも佛陀の光明中であるといふ事の了解された時に於ては。佛の御機嫌取りて善い事をするのではない。報恩のためにせねば相濟まぬのである。此相濟まぬといふ觀念之を御冥見に耻入るといふのである。

寢行儀のわるひ下女は。行燈を点して寢さすれば行儀が改まるといふ話。下女の寢行儀は行燈の火で改まるが。多くの人の起行儀の

わるひのはどうしても佛陀の慈悲の光明の中に入らねば改まらぬ。

○社會の恩

前回に於て佛陀の慈悲といふ二つを說かねばならぬのであるが。これは佛陀の恩といふことになれば。法の恩と僧の恩といふ根本が了解れば。自ら了解ることであるから略しておく。其次が心地觀經の四恩では。一切衆生の恩と說いてある。これは言換ふれば社會の恩ともいはれる。但四恩といふ方では人によりて說を立てゝあるのであるが。其人の集合體たる社會の恩といふことにして話すことゝせう。

我々は父母の慈悲に浴して居ると共に。又君王の慈悲に浴して居ると共に。將た佛陀の慈悲に照されて居ると共に。社會の慈悲即ち社會の恩を受けて居る事を忘れてはならぬ。抑々社會とはどういふ事であるか。此を學問的に講義をすることになれば。社會學者氣取りで面倒なる事をいはねばならぬが。通俗に之が定義を下すときは社會とは「世の中」といふ事である。そこで社會の恩といふことは。世の中の恩といふわけで。此を了解して居らぬ人は恐らくなからうとは思ふが。一應の話を試むるであらう。

社會といへば甚だ廣い。日本といへば一つの國である。併し日本は社會の一部分である。英も米も獨も佛も支那朝鮮も又露西亞の如きも社會の一部である。此社會といふものは其組立てられたる有樣は。丁度一人の人と同ドことである。人は社會の小さいので。社會は人の大きいのである。而して人も社會も共に一個の生物である。生物は種々の機關を有して居る。腦膸あり四支あり五官あり。肺や胃やら腸やら。小さい事をいへば髮毛一本も毛孔一つも皆生物と

として。欠くべからざる機關である。社會にも此等の機關が要るので。吏農工商の職業に差別あるのも。男女老幼貴賤富貴皆これ必要なる機關である。上大臣も必要なれば。下駄直しや塵芥取りも欠くべからざるものである。若いものは老人の經驗を聞き。老人は若いものゝ扶養を受ける。男は女。女は男。それ〴〵相扶け合つて社會の生存發達が出來る有樣は。一人といふ文字の左右相依つて成立つて居るが如くである。そこでもし此一機關を欠くが如き事あるときは。恰も吾々の身體の一機關を欠くと同く。不具の社會となり了るのである。不具位で止れはまだしもであるが。終には其社會の滅亡となるのである。そこで世の中は互に恩を受け合つて居るものであるから。百姓にも恩があれば町人にも恩がある。恩と恩と。慈悲と慈悲と。引き合ひ釣合ひして居るものである以上は。吾々銘々の考としては。此社會の恩義に酬ふるため。社會のためになる樣。社會を發達せしむる樣。力を盡さねはならぬわけではないか。之を社會に對する義務といふのである。

此の如く說き來るときは。各方の中には大變鼻を高くして。それこそ犯罪者も社會の一部分である。泥棒も博奕打も。世の中になくてかなはぬ機關である。して見れは强ちわるい事でもないらしいといふ樣な考を起す人がありはせぬかと氣遣ふ事である。誤解してはなりませぬぞ。露西亞は世界のバナルスである。犯罪者は社會のバナルスではないか。身體のバナルスは生命を取る。社會のバナルスは社會の生存を危くする。少くとも社會の發達を妨害する。身體のバナルスに就てはヤレ豫防だヤレ藥だとさわぐ人間が。自ら社會のバナルスとなつて。社會の恩義に背く樣な事を爲すとは。何といふ

心得違ひであらう。國家社會が此犯罪といふバナルスを驅除するために。果してどの位世話をして居るか。其統御者はどの位心配して居るか。今日日本の現狀より見るも。監獄の數が本分監合せて百二十八。四人の數が六萬。政府が監獄費としてのみ支出する金額は毎年六百萬圓である。上は大學より下小學校に至るまで。教育費として支出する費用と殆ど同額であるとは。如何に歎かはしい事ではないか。但し之は監獄費のみの話であるが。警察費裁判費等を加ふるときは。優に三倍以上即ち貳千萬圓に上るのである。社會といふ有機体に要する衛生費。即ち藥代も亦多額なるものではないか。先日もよそから來た或人の話に。此處の監獄は近頃新築されたさうですがもう調ひましたかと問ふから。私がイヤ中々の事で毎日何百人といふ人が。一生懸命に働いて居るがまだ〳〵出來ませぬ。何分參拾

萬圓といふ大普請だから容易には出來ぬのであるといふと。其人が喫驚して。泥棒なんぞを突込む場所に。そんな立派な者がどうして要るかといふ。私は別段其譯を說いて聞かせたことであるが。實にコンナ建築も積極的の目的に捧へられるのなら嬉いが。材木一本も煉瓦一つも。國庫を經て出る人民の膏血であるのに。出來上つたら千人近くの犯罪者。即ち社會のバナルスを收容されるのであると思ふて見れば。實に殘念千萬ではないか。建物が立派で自慢にもなるのは。學校や寺院の事である。監獄の建物の立派なるだけ。一面其社會の犯罪者の多い事を現はすものであるとは言はれまいか。

どうか各方は社會生存の意義を自覺し。社會に對する義務を盡すことに心掛けてもらひたい。少くとも社會の厄介物とはならないだけの覺悟をしてもらひたいものの。

（終）

法の舟やすく渡るは四の海
波しづかなる惠みなりけり。

たゝならぬ身となりしより明くれに
思ひをかけし親の大恩。

親と子は次第おくりと知るならば
次第おくりに孝行をせよ。

かばかりの事は習ひとゆるしおく
心の末のおそろしきかな。

顏や手のよごれはつねに厭へども
心の垢をすゝぐ人なし。

愼しめよ螢ほどなる煙草の火
心ゆるせば早鐘のをと。

闇路の光り

苅屋哲公述

○一、煩悶の原因

維摩經に「直心は是れ菩薩の淨土なり」といふお言葉がある、直心とは卽ち正直の心で、正直の心とは僞なく飾りなき心である、其僞なく飾なき心が菩薩の淨土であるといふみ教である。

人の苦勞の大方は、飾らんとし僞らんとするによりて存するものである。此心を除き去らば苦勞はないこととゝなるのである。見よ愚かなるものが、賢き風を裝はんとするによりて、彼は苦勞するではないか、貧きものが富みたるが如く飾らんとするによりて、彼は苦勞するではないか、器量の惡い女が別品に見せやうとして苦勞し、丁稚が番

頭顔をせうとして苦勞する、丁稚は丁稚で其儘偽らず、醜婦は醜婦で其儘飾らず、貧乏人は貧乏人のありのまゝ、馬鹿は馬鹿でありのまゝ打明けて、而して實際の賢者ともなる樣、實際の富者ともなる樣、勉强するのが善いではないか。

それについて幽芳の作つた小說にかういふのがある、理屈をいふよりは、其小說をあらまし話した方がよく合點出來るであらう、東京の或家に一人の娘があつた、名はお葉といふので、其娘が生來顏形は立派でありながら、悲い事には顏に大きな痣があつて、芝居でする累の樣にもあつたのが、大變醜いので、娘自身も我身の不具を果敢みて、一生嫁入はすまいと決心し、音樂學校に入つて音樂を稽古し、これで一生を送らうと思ふて居つた、其音樂學校を卒業した上句、何處ともなく病氣となつて田舍の景色のよい處へ保養のため轉

地をした、すると其宿に泊合せたやはりこれも保養のための一人の盲目があつて、柳村といふ詩人である、此盲目詩人も音樂が好きなので、徒然な折柄お葉がバイオリンや琴を彈いて居るのを感に打たれて聞いて居る、盲目で天然の美を目に見て、擅に詩歌に歌う事が出來ぬのを悲んで居るのを見て、お葉も自分の片輪より深く同情を表して、常に山の模樣や池の景を說明して、目で見るよりもつと面白い樣に、盲目詩人に聞かせて居つたが、互に其親切なやさしい心を知り合つて、親の許しを得て夫婦になつたのである。

夫は其妻の顏に大なる痣のあらうとは知るよしもなくして唯手で顏を撫で、見ては、顏立のよい美い女房だと自慢して居つた、然るに此盲目詩人柳村の友人に醫師があつて、先年眼科專門の研究の爲め洋行して居つたが、歸朝して柳村の目を見て、これは治療すれば片

目は見へる様になるといふので、そんなら治療してもらはうと喜んで入院する事となつた。

お葉は妻の身として、夫の目の見へる様になる事をば非常に嬉しく思うのではあるけれども、若し目が見へる様になつたれば、今までの夫に分からなんだ顔の痣が知れて、夫に愛想をつかされはすまいかと、これが甚だ苦になるのである、けれども止める事は出來ぬし、今更私は顔に痣があるともいはれず、遂に手術を受けさしたが、暫くは繃帶をしておいて、いざ此から繃帶を取らうといふ段になつて妻のお葉は目をまはしてそこへ倒れて仕舞つた、ふと目を開いて見れば別室に入れられて看護婦がついて居る、お葉は今や目を開いて此世の光りを見んとする夫の喜びに引かへて、身も世もあられぬ苦しみが、小い胸に溢れて居る、どうしたらよからうと思ふて居ると

院長が戸をあけて入つて來て、少しはよくなりましたかと見舞をいふてくれる、さうしていふには唯今柳村さんの繃帶を取りました、然し手術の結果は餘りよくないので、僅か五分か六分かの視力であつて、後はすぐ繃帶をせねばならぬ、然し柳村さんは決して不足はいはぬ、僅かの視力で結構である、多くは望まぬが、其僅かばかりの視力のある間に、妻のお葉の顔が見たい、此片輪者の柳村にあれ程同情を表し、あれほど親切にしてくれる妻お葉は、果して如何いふ美しい顔をして居るか、手で撫で、大體は知つて居るが一目見たいから此處へ連れて來てくれといはれるによつて、早く行つて顔を見せてあげなさいとの事である、此間に於けるお葉の煩悶苦痛はいふにいはれぬ程である。お葉はそこに立つて居る看護婦に目をつけて、何卒貴孃後生ですから幸ひ貴孃の御顔の恰好が私に似て、

而かも美い御顔であるから、一人の女を助けると思ふて、私の身代りに立つて下さるまいかと頼んだので、其看護婦も氣毒に思ふて承知し、お葉の羽織を看護婦がきて、看護婦の服をお葉がきて、夫に顔を見せたのである。夫柳村は思はく通りの我妻の美い顔を見て非常に喜び、これで本望であるといふたが、追々視力は失せて行つてもとの通り盲目となつて、身代りがうまく成効して夫は滿足したがお葉はます〳〵心苦しく、一生涯醜い顔を美く見られ居るのが苦になつて、煩悶絶ゆる時がないといふのである。自ら飾り僞ることの苦勞の種であるといふ事は、此話で合點してもらいたい、此話のお葉も、始めから自分の顔に痣があると打明けてさへおけば、一生涯こんな苦勞はないのであるに、かくしだてをしたばかりで苦まねばならぬ事となつたではないか、直心は是れ菩薩の淨土なり、正直な

もの程胸の中の安らかな事はない、兎角物事は飾りがわるい、惡人が善人に見てもらはうとし、愚人が賢者に見られやうとし、貧しきものが富みたるものゝ樣に見られんとして、口に僞をいひ身に飾りをつけ、世間を誤魔化して過ぎやうとするは、大に苦勞の種となることである、修養に志ある徒は、常に赤裸々、天眞爛熳にして而して進むべきである。

○二、順逆の二境

世の中の物事は相對的であつて、圓いといふ事があるから角のものもある、白いものがあるから黑いものもある、善い事があるから惡い事がある、我々の氣に向いた折もあれば氣に入らぬ時もある、此氣に入らぬ時をば逆境といひ、氣に向いた時を順境といふのである金のある時は順境で貧乏の時は逆境、人に譽められる、折は順境で、

人から謗らるゝ時は逆境である、要するに自分に都合のよい時は順境で、都合のわるいときは逆境である。然らば則ち順境と逆境とはどちらがよいかと問ふものがあつたならば、無論逆境は嫌で順境は好いと答へるもの十中の十であろう、吾等修養の方面から之を觀察するときは、其見解全く是に反するのである。

修養の方面から順逆二境を觀察するときは、金のないときよりは金のあるときの方が身を修めにくい事を知るのである、坦々たる倫敦街頭車馬反て危しとやら、人に譽められるときに慢心して失敗する事は、人に謗らるゝときにおのれこれ見よがしと奮發して成効するよりは常に甚だ多いではないか、失敗は多く都合のよい時に於て演ぜらるゝ事を知らば、吾人は逆境の反て順境よりは貴い事を合点するのである。古より社會の先達者が眼を茲に着けて教訓を垂れたるもの甚だ少くない、彼の「失敗は成効の基礎なり」といふが如き、「艱難汝を玉にす」といふが如き、何れか此邊の教訓に非るぞ。それ然り、彼の米國が獨立する事を得たるは、英國の苛政に苦しむの逆境に於てしたではないか、豐臣秀吉は其少き時、爵祿位地なき逆境に成効して、太閤關白となつて天下の威權を掌中に握つた順境の時、朝鮮征伐の野心を起して寧ろ失敗したではないか、韋提希夫人は其子のために七重の牢獄に投ぜられたとき、其苦に堪へぬが因となりて、安心立命の法を聞いたではないか、雨に打たれ風にもまれて、うき艱難を嘗め盡す斷崖絶壁の躑躅の花は、反つて室で咲かした牡丹よりは美いのである。

今境遇の順逆を以ていふときは在監人はぜ逆境はあるまい、口はあれぞも思ふことうをいふこと能はず、手足はあれぞも自由に運動す

る事能はず、哀々たる父母に事へんと欲するも事ふる事能はず、親愛なる妻子を撫育せんと欲するも能はず、廣い天地を我から狹めて五尺の身躰の置場に悶へ苦しむといふ今日の逆境、誠に氣の毒の至りに堪へぬ事である、併しながら徒らに悲しむを止めよ、自暴自棄する事勿れ、「つまらぬといふは小い智慧嚢」、各の修養すべきは正にその如き時である、飽食暖衣社會に居つて自由に起居する事の出來る場合は、各々修養する事の六ケしい時である。天はかくの如き不幸の人をして修養する處あらしめんとして、驅つて監獄に投せられたもので、名刀も研がねば切れぬ、彼等は今や名刀の砥石の上に載せられて居るが如き境遇にあるのである、若し監獄に入りながら徒に刑期を過して何の得る所なくして放免せんか、寶の山に入て手を空しくして歸るが如きものである、「うきことの尙此上につもれかし己が力の限りためさん」、古人監獄を福堂といへり、誠に適切なる名稱といはねばならぬ。

○三、目的と手段

先日から少し閑暇なので京極邊から祇園を經て丸山の公園を逍遙したが、社會は不景氣だなぞといふて居るけれども、あの邊には隨分澤山の遊人が集つて居る、祇園神社の東手より丸山へ出る處に、例の揚弓店が並んで居つて、門口に多勢の人が立つて中を見て居る、予も又立止つて何んであらうかと見てあれば、四五人の客人が皆此寒いのに片肌脫いで、一生懸命弓を引いて居る、人生の事は畢竟彼の揚弓店に同じき事を悟つた、弓を引くに的あり、的を射らんとするものは的のみを睨んで矢を放てば決して的に中るものではない、即ち先づ手元に氣を付けねばならぬ、的は目的で手元の注意は手段

である、世の人各皆目的を遂げんとして、種々様々に手段を廻らして居る、それを又世間の人が周圍に立廻して見物して居る、人生は揚弓店の如しと予の感ずるも無理ではあるまい。

各方の目的は何であるか、利益にあるか名譽にあるか、人間畢生の目的は名譽か、財産か、此は別問題として今日は論及せぬが、利益必ずしも悪しきにあらず、名譽必ずしも害ありとはいはず、利益も可なり名譽も可なりとしておかうその目的とする所の利益或は名譽を得んとするに當つては、先づ吾手元に氣を付けねばならぬ、即ち手段を撰ばねばならぬ、若し此手段に注意せずして矢を放てば的に中る事は出來ずして、或は下をくゞるか、上を飛び越すかして失敗に終るものである、世間には目的はかり睨んで居て足下に氣を付けず、躓き仆る、者は澤山ある、先年

の夏ペストといふ病氣が流行して非常に八ケ間敷豫防で、大阪邊から來るものは七條のステーションで檢疫せねば京都へ下さぬといふほどの事、處が此ペストの媒介者には鼠がなるといふので、鼠退治をやらねばならぬ。然るに社會の公衆衛生の思想が未だ幼稚なから鼠をとれといふたばけでは他人の仕事をする樣に思ふて、やるものがない、其筋で色々心配されて、遂に一匹の鼠を參錢で買上げやうや五錢で買上げやうといふ事になつた、人間といふものは慾なもので、今までは他人の仕事と思ふたものも、一匹五錢といふ相場ではとらずに措かれぬ、猫も杓子も鼠捕りにのぼせて居つた、其時西陣邊の或湯屋の三助が、暑いのに商賣たから仕方がない、釜の下をたいて居つた、庭の隅に一匹の鼠殿が鼻をひこづかせてうろつひて居る、時節柄見逃す事がならぬので、火箸を以て追廻し、遂にた、

き殺して捕へ得た、三助非常に恐悦して、今晩の酒手は先づ大丈夫と、鼠の尻尾をひつさげて其儘最寄の派出所へ持つて行つた、注文通り五錢といふ金を戴いたが、失敗た事が出來た、貴樣はなせ裸身で居ると咎められて、氣が付いて見れば成程衣服をきるのを忘れて居つた、科料參拾錢に處せられ、差引貳拾五錢の損をした、鼠を五錢に買上げてもらう事に心を奪はれ、衣服をきてでるのを忘れたのである。各方は馬鹿な三助だと笑はれるであろうが、殿鑑遠からず此三助の樣なものが此中に御座りはせぬか、財產が得たいといふのもよい、名譽が得たいといふのもよい、然しながら的にばかり目を付けて手元を正しくする事を忘れたゝめ、放つた矢は的の上を飛越して我身はそこに仆れて仕舞い、一念に思込んたる財產も名譽も得る事は出來ずして、我身は不幸の境遇に沈み、親兄弟や妻子にまで

非常な迷惑を見せ、見物して居る世人からは指して笑物となる樣な事になつたは、畢竟目的のために手段を忘れた過失ではあるまいか。

○四、小心翼々

修養に志あるもの、最も注意すべき事は、遠きを見る事にあらずして脚下を見る事なり、大なる心を存すべきにあらずして小心翼々たるにあり、故に一の善事に志さば明日を期せずして今日より着手すべし、其大ならざるを患へずして小なるものを力行すべし。太平洋も元は一滴、律の雫萩の下露より成りしもの、ヒマラヤ山も元は土壤の重りしものなり、千年萬年の長日月も分時秒時の連續より成るなり、故に小事を忽にせざれば如何なる大事も終に成就せむ、分秒を直くせば五十年の人世自ら直からむ、猶直線の全体直からんと欲せば寸分を直くせざるべからざるが如し。東京は東にあり廣島は西

にあり、東京に行かむとするものは一歩と雖も西に向ふべからず、廣島に行かむとするものは一歩と雖も東に向ふべからず、かばかり長き里程に於て一歩二歩は何れにするも相關する所なしとせば、終には目的地に達するの日ある事莫し、人生は長し、一年二年心の欲する所に從ふも何かあらんと、徒に前途をのみ見て、脚下を忘却するものは、終生爲す事なくして畢らんのみ、明朝を期する朝寢坊は何の日も亦朝寢を改むる事能はざるが如けんのみ、今日の難事は明日も亦難事なり、小事を難するものは大事尙且つ難きを知るべし、故に苟も修養に志あるものは一擧手一投足に注意する所なかるべからず、仕事場にあるときは繩の綯樣機の織樣、休息のときに於ては起居のものやう、此の如き些細なる事は如何なるも可なりとするものは、繩の綯樣が其五十年の運命に關する事を知らざるものなり、起

居の左右が其一身の苦樂を定むる事を知らざるものなり、古人歌ふて曰く、「吉野川その水上をたづぬれば葎の下露」と、斯くいふときは必ず思ふものあらん、大功は細瑾を顧みず、小事に拘泥して心を大局に注がざるときは反て事を謬るべしと、然り大丈夫事を成さんとするもの、眼を大局に注がざるべからず、然れどもそは志を立つる上に就ての事にして、修養の方法にあらず、ソクラテス曰く、天地を動さむとするものは、先づ自ら動かさるべからずと、志は大なるべし、而して志の大なるだけそれだけ身を持するは小事に注意せざるべからず、請ふ誤る勿れ。

○五、教育の話

穴に住み果實を食ひ水草を追ふて暮して居つた、野蠻蒙昧の時代もあつたに、今日は難有事には文明の餘澤により、甍並べる都は勿論

海人が塩焼く津々浦々、賤が木を樵る山間僻地に至るまで、衣食住の必用物より、電信電話の便まで も備りて、幸福なる生活を爲し得る事、思へば末世の幸福か、仕合を喜ばねばならぬ也。此の如く野蠻蒙昧の世を化して、文明開化の社會と變化せしめたるは果して何ぞ、惟ふに千差萬別の事情複雜なるべし、然りと雖も最も大なる原因は、教育にある事疑ふべからざるなり、我國に於ても古は庠序の設之なかりしにもあらざれども、其法甚だ完全ならざりしにより、之が功果も顯著ならざりし事なるが、近年に至りては之が設備漸く就り、小學校中學高等學校あり大學あり、小學校は如何なる山間僻地と雖も、村に一つは必ずあり、中學も今は一府縣下に三つも四つもある事となり、高等學校は或は東京仙臺、京都、山口等の數ケ所に設けられ、大學に至つては東京のみならず京都にも置かれ、ゆくゆくは東北地方にも九州地方にも、增設の計畫なりと聞く、其他慶應義塾、哲學館、早稻田等にも大學部あり、兩本願寺には佛教大學、眞宗大學あり、私立の大學も益々增加する有樣なり、教育の關鍵を主どれる學校の設備此の如く、昔の寺小屋時代とは殆ど比較すべき限りに非ず、其他出版事業に就て見るも、新聞雜誌書籍等、日進月歩彌々盛大に赴かんとせるを見れば、教育事業は中々盛大なることを知るに足る。

此の如く官民の教育事業に熱中せる功果は空しからずして、今日の文明を現出せり、凡そ教育は野蠻を變して文明とならしめ、瓦礫を化して玉とならしむるものにして、吾人に幸福を與ふる事尠少なりとせざる也。茲に鐵の棒あり、其價五圓、鐵蹄とせば其價拾圓五拾錢に上る、又之を針に造れば其價參百圓となる、又之を小刀とする

ときは參千圓に上り、又之を時計の旋條と爲すときは其價實に貳拾五萬圓となる、僅か五圓の鐵棒をして此の如く價値を高かめしむる所以のものは、錬磨の工夫によるものならずや。今此に目に一丁字なく、心に是非の辨前もなき一野蠻人ありとせよ、小學校に入りて教育を受くる時は、それだけの價が上り、中學に入りて教育を受くる時は又それだけの價が上り、進んで大學にも入りて學士博士の肩書付となるときは、先きの野蠻人變じて天晴の博識となる事、恰も五圓の鐵棒が變じて貳拾五萬圓の時計の旋條となるが如し、教育の効亦偉なるかな。

人教育なきときは野蠻の狀態に止る、野蠻人は是非善惡の辨前鈍く且つ良心の光明なし、此を以て犯罪者となる事多し、現在監獄に服役中の囚人の中教育なきが原因となりて犯罪者となれるもの、甚だ多きを見るなり、あはれ幼年のとき兩親の注意を怠らずして學者物知りといふまでにはなくとも、せめて一通りの教育を施し、人の行く道、物の道理を辨へさせて置きしならば、今日の有樣には立至らぬであらうと思はれる人甚だ多し、現在今日の少年犯罪者の如きは殊に此感ある也。各の中には子供のある人もあるべし、寺小屋時代の昔ならば致方もなきこと、今日文明の社會に於て學校は至る所にある事なれば、其子供に教育を施す事を怠らぬ樣注意あるべし、若し誤まる時は、可愛我子の一生涯を野蠻的狀態の中に陷らしめ、文明開化の眞中で、是非黑白を腕力に訴へて見たり、親には孝養を盡すべきことも、君には忠義を勵むべきことも、義理も体面も一向無頓着にて、恥を電氣燈の下に曝す如き無賴漢となるべし、諸君の中にも年の若い人も澤山あり、此等の人々は少し讀み書きに志し、い

ろは四十八字が讀まるれば、ふりかなつきの新聞雜誌やら、平易な書物は讀まれ、讀んで居る中に追々難字も覺へて行くといふ樣にすれば、土方でも手傳でも仕事のひま〳〵無用の煙草をくすべて居る間にでも、一通りの文筆は出來る樣になるなり、文字が讀めると、新聞讀んでも雜誌讀んでも、文字知らぬ人の知り得ぬ樂があるもの志さへあれば、それ位の事は容易の事なり。

扨予は教育の必用なる事を略說せしが、徒に教育〳〵といふも教育の範圍は廣し、仕方が惡るければ寧ろ教育なきに勝るなり、智育と德育と体育は智仁勇の三にして何れも偏廢すべからず、然るに世上の通弊として、智育と体育は進歩せるに、獨り德育のみは進まず、殊に智育と德育とは、鳥の兩翼車の兩輪、相伴はざるべからざるものなるを、智育は非常に先んじて、德育は後れてあり、智育のみ先んずるが故に、邪智徒らに多くなりて學問して反て不幸の境遇に陷るものあるに至れり、瀛車を行るに瀛鑵車の完全なるを要するは勿論なれども、瀛車をして安全に進行せしめんには、軌道の整頓を要すべきなり、然らざれば道なき道に衝入りて、轉覆せざれば破壞するの不幸を見ん、智育は瀛鑵車なり、德育は軌道なり、智識のみの進歩せんよりは、寧ろ德育の進歩せん事こそ望ましけれ、各の中には不幸にして智育の瀛鑵車が折角立派に出來上りながら、德育の軌道が不完全な爲めに、遂に轉覆に立至れる人もあるべしと考へらるゝ也。

然るに怪しむべし、此に氣付かずして在監人となりても尙書物の取下を願へば、即ち經濟書に非されば法律書、或は英書或は漢書、多くは智識慾を充たすが爲めの讀書にして、精神的滋養となるべき德

育の書物に至つては、反つて之を嫌惡するかの如き傾きあり、社會生活の必要上、經濟書も可なり法律書も可なり、然れどもそれらの人々の仕事は精神の修養より急なるはなし、此需要に應するには、德育に關する讀書こそ最も必要なれ、今日教育の必要を說くに當り教育中德育の忽にすべからず、特に失意の人に於ては最も注意すべき事柄なる事を承知せられん事を望む。

○六、百行の本

古語に忠臣を求むるは孝子の門に於てするといふてある、君に忠義を盡す程のものならば、必ず親に孝行である、親に孝行でない程のものならば、君にも不忠の臣である、豈君に不忠なるのみならんや朋友と交つては信義を欠き、兄弟夫婦も仲惡しく、終には一切の人より彈指せらるゝ樣になる、それは其はづ、海岳啻ならざる大恩受

けた兩親に、程能く事へぬ樣な人間なら、その他の人に都合能く交る事の出來ぬは、無理ならぬ次第である、故に明君賢相が家來を抱へやうとするに當りては、如何に弓矢の道に達して居らうとも、讀み書きが立派に出來るとも、兩親を粗略にする樣なものでは、尙君でも粗略にする、そこで孝子の門に於てすといふてあるのである。誠に孝は百行の本で、人生五十年の間、身を修め國家に盡す事の基ばかりではない、吾等が迷を去つて悟を開く所の因ともなるのである、觀無量壽經に、父母に孝養するは三世諸佛淨業の正因なりと說いてある、さうして見れば世出世とも、如何に孝行の大切であるかといふ事は解るであらう、さて孝行といふ事はこれ程大切であるがどの樣にしたら不孝のものが孝行が出來る樣になるであらうか、世の中に如何に不孝なる子でも、孝行の善い事位ひは知つて居らぬも

のもあるまい、また心底より孝行のしたくないものもあるまい、然に事實孝行息子の甚だ多からずして不孝者の少からぬは何故であるかといふに、これには大に原因がある、原因とは何ぞ、曰く親の慈悲を十分嚙み分けてをらぬ故である、親の慈悲を多少知らね者はあるまいけれども、貧乏なるとき壹圓札一枚惠んでもらうた程にも思ふてをらぬ故である、哀々たる父母我を生むで苦勞す、襁褓の中より育てられて、山よりも高く海よりも深き御大恩を嚙分けてをらぬからである、胡椒丸呑みでは分らぬ、嚙みしめて味ふて見れば、親といふものは下には置かれぬ大切なものであることが分る、各方は何が大切といふても我身はさ大切なものはなからう、親となれば我身よりも大切なものが出來て、たとひ我身は寸々に碎けても、我子のためには命も惜しまぬといふが親の慈悲である。今は昔越後の國

の山中で、母子諸共に雪中に倒れて、母は死んだが子は助つたといふ話がある、時は師走の中ばで、昨日も今日もと降りつゞく雪の中を、據なき用事あつて、一人の旅人山越しにとかゝつた、何處が道やら何處が谷やら、見渡す限り一面の雪、杖をたよりて辿つて居つたが、はるか向ふの方にあたりて、何やら泣く聲がする、獸にあらず鳥にあらず、奇怪至極の聲である、はて何であらうか、耳を澄してよく〳〵聞けば、どうやら小兒の泣聲らしい、此山の中といひ此雪の中といひ、小兒のをらう筈はないにと、不思議ながらに聲する方に行つて見れば、雪が降積みて小高いものを蔽ふてをる、其底の方で泣聲がする、杖を以て雪をかき除けて見れば、一人の若い女が伏臥して居る、其下に四つ計りの娘の兒が、母の身躰に敷かれてをる、さては母子と見へるが、不愍な事ぢや、母親は全身ひゑわたつ

て氷の如く、今は息も通はぬ有様である、それにしても三つや四つの子供が、能くマア生きて居つた事ぢやと思へば、それはその箸子供には着せた上にも又着せて、母の腹の下に抱いて入れ、其母親は襦袢一枚になつてをる、子を持つて知る親の恩、子のある人は此味が分るであらう、あゝ親なればこそ〳〵我身はたとひ死ぬるとも、我子はどうぞ助けたいと、我子のために我身を犠牲にした念力が、到り届いたといふものか、小兒は旅人に助けられた。燒野の雉子夜の鶴、親となりてはこの位子を思ふものである、三千世界を鉄の草鞋で尋ねて歩いても、我身を殺しても助けてやらうの大慈悲心のあるものは、たつた二人の親様ばかりぢやぞ、親の慈悲を道理々々屈で並べるよりは、論より証據の事實話でも得心してもらいたいのである、然しかやふに話しても、それは並々の子に對する親の慈悲で、

私共の親はもう〳〵私共に愛想を盡し、勘當まで受けた身の上で御座りますといふ人が、此中にありはすまいかと心配する、其處が即ち味ひのある處ぢや、如何に放埒な我子でも、勘當したくて勘當するのである、「親やせて子に榮へよと里芋はゑぐうなつたり甘うなつたり」、「古里や臍の尾に泣く年のくれ」、大晦日の夜、年寄夫婦が火鉢のそばで、勘當した我子の事を思出し、今頃は何處をうろつひて居るぢやらう、また人間には得成らぬかと、我子の臍の尾を取り出して、涙にむせぶといふ意味が此發句ぢや、どうぞ〳〵の親の慈悲から、ゑぐうなつたり、甘うなつたり、此様にしてやつたら人間になるであらうか、彼様にしてやつたら人並になるであらうかと、慈悲の心が溢れて出ての仕打であると、親の叱りは難有頂戴せねばなら

ぬ、個様に話して來て見れば、親といふものは徹頭徹尾慈悲でかためられたものであるといふ事は分つたであらう、此様なる高天無比の鴻恩を受けながら、これに報ゆる事を知らぬは、禽獣といはんか人非人といはんか、此恩に報ゆる事でさへ知らぬ様なものでは、成程君に忠義も出來まい、況や妙覺果滿の覺りを開くことも出來まい實に親に不孝なる者程恐ろしいものはないのである。然らば則ち如何様にしたならば、不孝者の誹を免れて、孝行者となる事が出來るか、孔子の弟子子游が、孔子に孝子とは如何様にするのであるかと問はれた、そのとき孔子答へて曰はれたるに、今之孝者、是謂能養至於犬馬皆能有養、親をやしなへばそれで孝子だと思ふて居るものがあるが、それは犬でも馬でする、孝行である、萬物に靈長たる人間の孝行は、犬馬に勝る所がなければならぬ、その様に異れはよ

ろしいのであるか、曰く人は形躰よりも大切な心といふものゝある、事を忘れてはならぬ、食前方丈美女數百人、金殿玉樓に住まはして金剛石の瓔珞の下つた衣服は着せても、心配させては何の詮もない若し親の心を慰め樂ましむることが出來たならば、粗末なものを看てもべても、粗末なものを食ても、親は滿足して下さるのである、たとへは今監獄に居る様な子が、親を大切にしたいと思ひ、親類知己のものに賴むで、どうぞ甘いものを食はせて、よいものを着せて、不自由をさせぬ様にしてくれと賴んで、親類知己も其通りにしてくれるにした所で、親の身になつて見れば、可愛我子が赤い着物をきて鐵の鎖を纏ふて居つては、山海の珍味も何の甘からう、錦や純子も何の快からう、して見れば孝行といふものは、唯形躰の上に止まるものではない、父母の心を安んぜしむるのである。各方も苟も親の

慈悲が嚙み分けがついたならば、どうぞ一時も早く孝心になりて、生きて居る親に安心させ、死んで居る親にまで草葉の蔭で喜ばれる様な身の上になられうならば、誠に結構なる事である、嗚呼思ふて見れば、天にも地にも兩親に嘆きをかける程不孝な事はない、と共に、嬉涙を流してもらうことほど、孝行の事はないと私は思ふ、各方にして此の如き見事な人間となり得られたならば、啻に孝子たるのみならず　陛下の忠臣である、國家の良民である、進んでは三世諸佛の淨業の正因である、故に孝は百行の本である、（闇路の光りおはり）

附錄

信海一滴

富井隆信述

○理屈好き

人間は道理好きの動物で有ります。——道理好きと云ふよりは、寧ろ人間の心が、道理といふものに其の活動の範圍を、制限せられてゐるといふべきで有ります。……一寸註釋をいたしておきますが、心の活動の範圍が制限せられると云ふ意味は、たとへば極愚直な人があるとすれば、その人は決して突飛な、急激な、氣のきゝ過きた思ひ切つたやうな、素晴らしい大した事は、何事につけても得致さぬものである、それゆゑに世間でも、彼奴がなんでそんな利巧なことを爲様ものかとか、それはアノ男ではとても六つかしいとか様

に、その人の能力を豫定想像することをいたします。これは人は其の性質の爲に、心的活動を制限せられてゐるものであるからです。正直な性質の者は到底亂暴な考をすることができず、輕躁な者は必ず落ち着いた思案をすることはできぬ、それが性質に制限せられるといふものであります。今申しますところの心の活動の範圍が制限せられるといふ制限の意味も、やはりそう云ふ風な制限の意味でさりまして、人間の心は道理に制限せられてゐるものである、是でも非でも道理の立たぬことには決して人間の心が安心するものではありませぬ、それゆゑに人は何を爲てもそれがせねばならぬ、又は爲ても構はぬことであるといふ道理――理屈を見附けなくつちや承知しない、道理有て爲たことはよいが、道理なしに爲たことでも是非それに尤らしい道理を接着けやうとするものです、何ら向いても道理なければ安心の夜が明けないから、一も二も理屈をつけやうとするから、人は道理好きの動物であると申すのです有ります。

何故、人間はその樣に理屈が好きかと云へば、理屈が立たねば安心ができぬからで有ります。ところが理屈といふものは何うでもつけられるものです。ベンヂヤミン、フランクリンの自傳に面白い逸話が出てゐます、フランクリンが弱年の頃、菜食會といふ肉食を禁する團體に加盟した、數年間辛防して精進でやりとほしましたが、ドーカすると時々肉が食ひたい欲が起る、或時旅行して船に乘りましたところが、船の中で頻りに肉をあぶる香氣がするので、食ひたうて〳〵ならぬが、いや〳〵と辛防しておりましたが、偶々船の中で魚を釣つてゐるものが有つて大層大きな魚を獲た、それを料理するのを見てゐたところが、其の大きな魚の腹の中には、今呑んだは

かしの小魚が一匹這入つてあつた、それをフランクリンが見てフツト思ふやう、ア、魚同志でさへアノ通り大魚が小さい魚を食うてる、シテみれば階級の勝れたる人間が、おのれより下等なる魚を食ひ、肉を食ふは、何も不慈悲不道徳とするには及ばぬことである、生物を食ふて己れの生を養ふが不慈悲であると信ずればこそ菜食會に加盟すれ、それが不道徳といふ譯でない以上は、無理に欲を制するには至らぬ、まゝよ、いつそ食へ。と決心して、とう〳〵數年來操持し來りし主義を擲ち、菜食會を脱するの人となつた。……が、實の所白狀すれば、モウそれ迄に肉食がしたくて〳〵たまらず、さりとて見す〳〵欲情の爲に主義を投棄するといふも心にすまぬ所があつて、偶々見た所の事實を捕へて、無理無體に屁理屈を拵らへる。そこで、以て當坐逃れの氣安めの材料としたのである。換言せば強て良心を欺いたのである。今にして思へば意志の怯弱なる慚愧の至りであると自分で云ふてをります。理屈といふものは何うでもつけられはつけらるゝものであるから、理屈があるからと云つて、必ずしもその安心が正しいと云ふ理由にはならぬので有ります。何となれは今申しましたフランクリンのそれの如く、安心ではなくて、良心を一時瞞着する爲にも理屈はこねようなら隨分こねらるゝからであります。

然るに欲情の激烈なるが爲に、強て似非理屈をひねり出して、以て自己の良心を瞞着して罪惡を遂げ、又は繼續せんと欲するものがあるは、其人の愚なる固より憐むべく、又社會に取ては此ほど危險なことはないので有ります。私の知れる或人は斯云ふことを申しますに西鄕隆盛の一生はいはゞやまこに奏効て顯

貴に榮達し、やまこがはづれて遂に賊名を蒙らされたのである、犯罪といふものも偶々やまこの失敗たるに過ぎないので、失敗は失敗ながら、何もそれが慚づべきの事ではないのであると。

又或る人が申しますするには、身體は借家同然だ。借りて住み込む主人は別に靈魂といふものがある。借家の軒傾き、柱朽つるとも、嫌やになつたら出て行くまで、主人公に於て何の關する所はない。肉體は借家だ、靈魂なる主人公が一時借住するまでのもの、然れば肉體は假令罪惡の用に用るとも、そんなことに頓着は無用だ、只靈魂を少しでも快く慰さますする方がいゝのであると。成程理屈といふものは附けようとする日には、どうでも附きはするものである、さらばその通り理屈がこぢつけらるゝからといふて、果して自己の良心が何時迄も其のこぢつけ理屈に安心し承諾してゐるであらうか。

良心は一時でまかされるものである、しかしながら永く何時々々迄でまかさるゝかは疑問である、もしも一時はでまかされても、遂には本然の正確なる判斷に復歸するものであつたならば、その時は卽ち其の人の大に深く悔ひ懼るゝ時でなければなりませぬ。私が考へるには、良心といふものはちやうど革毬のやうなものであらう、一時へつこんでも、遂には自身の彈力により元の通りに、必ずふくれるものであるに違ひなからう。人間の良心が果して革毬の如きものであるとすれば好い加減な瞞着的似非理屈をこゝつけて、強て良心を壓服し彷徨させて、其虛に乘じて私欲私情を放縱ならしめんとする自己自身に對する欺詐的工夫は、甚だ其人に取つて將來の苦痛悔懼となり、且つは社會の安寧平和に對して頗る危險なことであるから、是非無理な理屈を強て搆成せんとし、又搆成しつゝある

のを、一切排掃除却せねばならぬ事であらうと信じまする。釋迦如來は大經の中に、

心の中、閉ぢ塞がり、意に開解せず、大命將に終らんとして、悔ると、懼れと、交々至る。豫て善を修せず、窮るに臨んで方に悔ゆ、之を後に悔ゆるも、將た何ぞ及ばんや。

とお說きあらせられてありまする。近來の風潮、人心がすべて突飛急激に走る惡癖があるかのようである。それゆへに學問に於ても、餘り奇を弄し、新を喜ぶの結果、倫理學上にさへも、種々人心を惑亂させ、迷惑せしむるやうな唯物的快樂的學說が行はれる位であるから、一體の人の趨向が、萬事卑俗に、沒德に、主我的に流れ、遂には廉恥を忘れ、法網をくゞることさへも、それ程賤しむべく、惡むべき事とも思はぬものがあるやうであります。此等は皆自己の良心を一時似非理屈の爲に瞞着し、痲痺させたものであるが、實にその將に來らんとする悔と懼とが氣の毒でなりませぬ。それゆゑに私は世人がどうぞ、似非理屈に謬らるゝなからんを偏に希望するのであります。

○意地

人間には意地がなくてはなりませぬ、男の中の男といふは意地の強い男のことである、ウシと云へば飽くまで引き受け、イヤといへは積でも動かぬ所に男らしさがあるので、右に惑ひ左に怖れ、決定て決定らぬ意氣地なしはどシミッタレたものは無い。意地の強いのは反て女に多い、最も女の意地は消極的で、子バリ強くて、しつこき陰性である、男は多くは感ト易くて、氣が淡泊してるから反て割合には意地が弱い、しかし男女を問はず人には意地が有つて

欲しい。さて意地と言ふ言語は、多くは反抗的我執といふやうな意味に解せられてゐるが、それは甚しい誤謬である、何か氣に喰はぬ事でも有る場合に、おのれやれとヤッキに成て反抗する、理非を問はず、程度を論せず、事の本末、結果の成否をも顧慮せず、一概に片意地を張るは、それは、憤慨で有つて、意地ではない、意地は必ず始終貫徹でなければならぬ、又意地は必ず情の波瀾に偶生すべきものでない、心の深底に據守されねはならぬ、故に意地と云ふは大抵主義と云ひ、操守と云ふやうな性質のもので有る。しかしながら只主義や操守やといふと、ドウか餘り理的冷靜に過ぐるやの氣味がするから意地と言ふが宜からうと思ふが、意地は頑強な力でなければならぬ、對手の親切に感謝するとも、又は交誼が幾ら隔なからうにも、そー云ふ情實の爲めに意地は屈するものではない、親切は親

切として、親密は親密として、別に意地は依然として獨立不變でなければならぬ。例へば夫婦の間柄にても、夫は夫の意地を立て、妻は妻の意地を守りて、その間柄の親密の爲に何等の變化を受けべきものではない、女房の情願に動かされ、女房の機嫌を取らんが爲めに、聊にても己が意地を曲げて苟合を許すが如き亭主は、いづれ女房の尻に敷かるゝ男で有る。

伊藤仁齋先生が正月前の師走の下旬に、妻女が愛子の爲めに餅を買はんことを懇願した時に、讀みし書物から眼も放たず、咳一つせずに、無言の儘着てゐる羽織を投げ遣りて知らぬ顏をしてゐられたと云ふ、ナント天晴れなものではないか、何でも軍國多事の今日であるから一番大儉約をせねはならぬと自分では決心しながら、女房が帶が欲しい、簪が欲しいとせがめば、三度に一度は買つてやらね

は濟まぬかの氣がするやうでは仁齋先生の足下にもおつつかれぬ事である。女と云ふ者は元來押の強いもので、付け上るもので、巧に男を牽制する力を有つて居る、それ故に男同士は隨分意地張りでも女に對つては一向意地のぬける事は夥しい、これ大きに工夫すべき所である、特に妻子に對して意地を曲げぬと云ふ事の工夫は、甚だ人格に關係するものである、意地を曲げて妻子に從ふものは、押しづよく付け上られて、終には尻に敷かるゝ格となるのである。兎角人は他の意を迎ふると云ふことは頗る善くない、必ずや他をして我に服せしむべくあらねばならぬ、我往かずして彼をして來らしむべきである、迎ふると、服せしむると、往くと來らさるとは、卽ち意地の張り工合に有ることで有る。意地は他人に對して曲ぐべからさるばかりでなく、妻子に對して曲ぐべからさるばかりではない、自分自身に對してさへも曲げてはならぬものである、名の爲めに、利の爲めに、高慢の爲めに、偏執の爲めに、知りて、或は知らずして自己自らのために其の意地を曲ぐる者尠くはないのである。

意地は力である、退て守るはかりではない、進んで爲すべき力である、意地の爲めには吾が肉體を犧牲に供し、吾が智力を犧牲に捧げねばならぬ場合もある、況んや吾が富貴利達、安逸遊樂おや、それ程のもののために進退を左右せらるゝが如き低き價値のものでは無い、繰り返して言ふが、意地は決して反抗的我執では無い、我慢では無い、心の深底に根據して始終貫徹すべき活動不休なる吾人の大主義大操守である、意地を立て貫くを榮とし樂とし、否らさるを辱とし苦とするので有る、男らしい男、男の中の男とは獨り幡隨院

長兵衛ばかりでは無い。

吾人は如何にして意地を立て貫き得るか、どうして片意地、惡意地にならぬやうにすることが出來るか、此工夫に就ては余はほとほと佛樣に憑る外なきことを感ㇳた、余は從來種々の境遇に對して屢〻反抗的なる惡意地を立てた、しかしながら一度も立て貫いたことは無かつた、余が意地はマツチの火のやうである、バツト燃えて直ぐに消える。然るに佛樣の思召に違はぬやうに余が意地を立てようと考へてからは譬へば線香の火となつたようである、風がふけば吹く程燃えても消えはせぬ、光は微かで有つても反抗的に一時バツト燃え上るのではない、たとひ反抗的に起つたのでも佛樣の思召に適ふか適はぬかを校量推度して採用せば、これ亦線香の火のやうになつて貫徹する。然れば吾人の意地は佛樣の思召に結合せしめて始めて貫徹することを得、亦惡意地に陷る事を防ぐことが出來るので有ります。

○無　我

今生と未來とは、同ㇳ時間の一つゞきにて、其間に起る事がらを離れて只時間と云ふ一方から觀れば、未來の今生のといふ差別のあらふ筈はないが、但し其差別のない一つゞきの時間の間に出來る事がらから云へば、今生未來の其間に、大きな段落がついて、それがために一つゞきでありながら、何たか甚だ隔たつたものゝやうな氣がするのである。甚だ隔たつたものゝやうな氣がするから、今生に執するものは、未來を忘れ、未來に着するものは、今生を疎んずるやうに傾いてゐるが、恰かも日沒すれば日無しと思ひ、日出づれば夜無きものと思ふやうなもので、愚もまた太甚しと云はぬばならぬ

既に今生と未來とは一つゞきの時間であるとすれば、今生には必ず未來が續き、未來の前には必ず今生がつゞかねばならぬ。然るに世間大抵の人が、未來を氣にかけぬものは、只現在一世に耽りて、我儘に流れ。未來後生を念におく人は、一向に今生をおろそかにし苦は一世、樂は永生、雨ふらば降れ、風吹けば吹けとやうに、厭世どまではならずとも、娑婆の勤め營みを輕んずるが如き有樣なるは甚だ以て然るべからざる次第、兩者共に注意せねばならぬことで有ります。

吾々が何地へ往くにしても、又其往く方法は滊車であらふと、腕車馬車であらふと、荷も陸の上ならば必ず道路に由て往くに違いない。それと同ドやうに、吾々が善をするにしても惡をするにしても商賣しやうが、農業しやうが、名譽のために仕やうが、利得の爲に仕やうが、必ず或るものに因てしておるのである。由て立つ或るものがあるに違いない、各方、考べて御覽なさい、その或るものとは何んでございませう。

或るもの……世に在る人の有らゆる思想行爲の基礎となりてある或るものとは、我と云ふ觀念で有ります。各方、如何でせう、我と思ふ考無くして、思想し行爲して居るものが此世界十四億の民衆の中、果して幾人でございませうか。精勤する所以のものも、我といふ觀念に由てある。怠惰なる所以のものも、我といふ觀念に由てゞある。我が利ならんことを欲し、我名を求めんことを欲し、凡て我といふもの、爲に生活行動して居るのでは有りやせんか。各方、此處を能く考へて下さい……然るに其の我なるものは、永久のものでは有りませぬ、我が爲したる行爲、我が得たる利得、我が博し

だりし名譽、それのみならず肝心根本の其の我なるものさへ、やがて一樣に滅亡に歸してしまうものでは有りませぬか言はゞ春の泡雪の如き短き存在のために、叫喜喚笑煩惱擾亂するまでのものが、人間の生涯では有りませぬか。

我といふ執着は、未來を案せぬから出來るのである。若しも未來に氣が着いたならば、滅亡にかくるべきものを棄てゝ、永生にあらはるべきものを取らねばならぬ筈でございませう。

永生とは、宇宙の實在、卽ち實體に歸入することで有ります。實體とは、普遍的、必至的、非活力的のものである。實。我といふ觀念は、非普遍的、非必至的、非活力的のものである。實體は、小さき我を融卜て、大なる一味平等中のものとするものである。我は、大なる一味平等のものを、小さき差別的執着の中へ强て押し込まふとするものである。我の小たることが知れれば、實體の大に歸することを求めねばならぬ。然るに其我の小なることの了解が出來ぬと言ふが、未來を知らぬからであるのでせう。

たとひ其思想、其行爲が、善美であるにしても、なほ我といふ觀念からして現はるゝならば。未だ實體を去る遠しと云はねばならぬ古人は之を雜毒の善、虛假の行と名けられてある。況んや吾人の一生、幾何か善を爲し得る、幾何か德を積み得る、否、鳥の啼かぬ日はありとも、吾々が慾を起さぬ日がありませうか。明かし暮らす一年三百六十日、其うち幾日吾々自ら快しとする無垢純潔の日がありませう。親に仕へて不孝がち、友に接して不信たらけ、出でゝ虛言云ひ、入てでまかす、割て明かせぬ胸の中に、包む惡業煩惱は、それ程で有りませう。我身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より

このかた常に沒し、常に流轉して出離の縁あることなし、我と思ふて爲すことゝ、出離の縁とは正反對なり。善惡共に我と思ふて爲す故に、善惡共に出離の縁に乖く。されば我身を愛し、妻子を愛するも、出離の縁にたがひ。朝につかへ、野に營むも、名に奔り、利に趨くも、亦皆出離の縁にあらず。今現に爾り、過去また爾りしなるべく、未來はた異る所なけん、常歿常流轉とは實際われ〳〵の身の上でありませう。

滅亡すべき事に從ひて、日々に出離の縁に遠かり行く吾々の生涯こそ、はかなきあはれなるものでは有りませぬか。

南無阿彌陀佛とは、南無は歸命なり、たのむといふ事である。何をたのむぞと云はゞ、阿彌陀佛の御本願をたのむのである。阿彌陀佛とは、たすけすくふといふこと、何をたすけすくふぞと云はゞ、たのむものをたすけ給ふなり、そのたのむと云ふは、我身をまかせて、如來樣にうちもたれることである。善からんとも惡しからんとも、佛になられやうとも、墮ちて地獄に苦まふとも、まかせ奉る上は、只如來の御思召次第、我はからひも、智慧も思案もさしはさむべきにあらずである、されはたのむと言ふは、すなはち我と思ふ心をすてるといふ事である。各方、此處を能く承知なされ、たのむといふは、我と思ふ心をすてはなれることである。それでどうなるかと言はゞ、たのむものを御助けの御本願なれは、我と思ふ心をすてたものは、佛にたすけらるゝので、それが卽ち實體に涉融したのである。小さき我の無くなつたが、卽ち大きな普遍必至的の實在とろけ合ひ、結び着いたのであります其の實在實體を、人格的に言ひあらはしたが佛樣といふものである。そのたのむと言ふことも、我

と思ふ心よりたのむのぞはない、我はからひぞたのむのぞはない、南無の機までも阿彌陀佛の御手許に御成就下されたのが、衆生貪瞋煩惱の心の中に印現して下されたのである。それゆゑに信ずる心までが他力の御廻向でありまする。されは他力とは無我の頂上、機法一體とは法界外唯一普遍の實在の活動で有ります。

一よきことをしたるが、わろきことあり。わろきことをしたるがよきことあり。よきことをしたると思ひ、我といふことあれはわろきなり。あしきことをしても、心中をひるがへし、本願に歸すれは、わろきことをしたるが、よき道理になる由仰られ候。しかれは蓮如上人は、まいらせ心がわろきと仰らるゝと云云。（御一代聞書）

一佛法には無我と仰られ候。我と思ことは、いさゝかあるまじきことと也。われはわろしとおもふ人なし、これ聖人の御罰なりと御詞候。他力の御すゝめにて候、ゆめ〳〵我といふことはあるまじく候。無我といふ事前住上人も度々仰られ候。（同上）

我と思ふこゝろが無くなりて、本願一實に歸し、如來の心光に攝取せられまゐらせたるが、他力信心のすがたで有る。さて心光攝護の身の上と召し成されたる上は、此世の營み一擧一動、我と思ふ我欲より振舞ふてはならぬ。只我身はわろきいたづらものと思ひ知りて、佛恩報盡の一念より、萬事立ちはたらかねはならぬ、佛恩報盡の爲めには、此世をは假りの浮世ぞ兎も角もあれなど、おろそかにすべからず、身を粉にし、骨を碎きて、世の爲國の爲めに盡されはならぬ。我といふ思を離るれは、世法卽佛法、日々の娑婆の勤めが皆佛恩報謝の行ひの外ではないからである。つまり我の思ひを離れ

て見れば、今生未來は同じ時間の一つゞき、何れに重い輕いの差別もないことである。未來も佛恩報謝につとむべく、今生も佛恩報謝につとめねばならぬ。我情を離れて一實眞如の大道に入り、一實無我の信心より、娑婆假諦の營みに入る。未來今生の差別もなく、佛法世法の差別もなく、只報恩歡喜の一念より、念佛もろとも勇み進んで世務に從ふべきことで有ります。

稱名はいさみの念佛なり。信のうへは、うれしくいさみてまう す念佛なり。（御一代聞書）

實如上人さい〳〵仰られ候。佛法のこと、わがこゝろにまかせず、たしなめと御掟なり。こゝろにまかせてはさてなり、すなはち、こゝろにまかせず、たしなむ心は他力なり。（同上）

この世の、わろきをもすて、あさましきことをもせざらんこそ

世をいとひ、念佛まふすことにてはさふらへ。（末燈鈔）

佛の御ちかひのあればとて、わざとすまじきことどもをもし、おもふまゝきことゞもをもおもひなんどせんは、よく〳〵この世のいとはしからず、身のわろきことを、おもひしらぬにてさふらへば、念佛にこゝろざしもなく、佛の御ちかひにもこゝろざしのおはしまさぬにてさふらへば、念佛せさせたまふともその御こゝろざしにては、順次の往生もかたくや、さふらふべからん。（同上）

念佛まふさんひとぐ〳〵は、わが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため、國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらはゞ、めでたふさふらふべし。往生を不定におぼしめさんひとは、まづわが身の往生をおぼしめして、御念佛さふらふべし

わが身の往生、一定とおぼしめさんひとは、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念佛こゝろにいれてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれと、おぼしめすべしとぞおぼせさふらふ。（御消息集）

○他力攝化

地に水氣が涸れはてたならば龜裂を生ずるでせう、人に宗教の信仰が無かつたならば眞の力は出て來ぬであらう。宗教の信仰と云ふは人と佛と結び着いて離れぬ關係を生ずることで有ります自力自攝と申して自分の力で修行研究を積みて開悟の境界に至らうとする自力の教は、佛を自己の心の中に發見て、それと一致しやうとするのである。又他力の教と申して阿彌陀如來の御助けによりて佛果に至らうとする教は、自己の心の中ではない、阿彌陀如來樣といふお方と一致することによりて成佛を期するのである。自力の法は佛と一致せんが爲めに善根功德を累ね、他力の道は佛と一致して而して倫理道德に進み、惡を斥け善を行はんとするのでありまして何れにしても罪ある凡夫が、その力は弱いので有ります、只弱いはかりでは無い、善に向くべき力さへぬけて、放逸邪惡の龜裂を生ずるので有ります。

正義は最後の勝利者とやら申しまして、善ほど強いものは有りませぬ。謂はゆる仁者に敵無しで國民の強いと云ふもなら云ふもので有ります。今度の戰爭にて日本國の名譽勢力は更に一段の進歩をいたしました、どうか強いは軍人はかりでなく國民全體がさらいものになりたい事で有ります。善を爲す國民が殖えてほしいもので有ります。善を爲すには學問が盛になるは

かりでもいかず、實業が盛になるはかりでもいけませぬ、是非佛と結びつく心卽ち宗教の信仰心が盛にならねばならぬので有ります。

ところが善を勵みて而る後自已心中の佛を發見する自力教は到底吾々の歯に合はぬ、心中の佛を發見するなどの大仕事はさておいて日常普通の人の道を踏み行くことすら先づ以つて六ケしい、それゆゑに吾々風情が善を爲し人道を盡さうとならば、何はさておき最初に廣大なる佛の威德と結び着いて、それから佛恩報謝のたしなみと上から下へ降るが適當で有ります、卽ち他力の信心を獲るが現世に於て善人となるの捷徑で有る。

他力の信心とは如何なる事でせう。他力の信心を說き明すには、彌陀成佛の說明をせねばならぬ、彌陀成佛を說き明すには、法藏菩薩の因位の立願を說かねばならぬ。

むかし〳〵法藏菩薩と云ふお方が有りました、そのお方が志願ありて諸佛の淨土を御研究になりましたが、何れにおろかは無い皆々結構では有りまするが。只一つ惡人女人を助くる方法が稍菩薩には御不滿足で有りました。そこで自分が成佛のあかつきには何でも女人惡人を救ふべき仕組みをせねばならぬと思召されまして、大に工夫をお凝しになり、忍びがたきを能く忍び、作しがたきを能く作して、只助かる緣のなき女人惡人を助くべき爲めに精進勇猛の大修行をなされました。

やがて法藏菩薩の御修行は成就しました。法藏菩薩は成佛して阿彌陀如來とならせられ、女人惡人を助くべき無上最勝のお淨土は出來上りました、これを極樂國とも安養界とも報土とも申します。助かる緣の絕ゆはてたりし惡人女人が、安養淨土に往生して、やすや

すと無上佛果のおさとりに達すべきお淨土は見事に出來上りました
どうして惡人女人が助かるでせう、お淨土に往つて佛になれるでせう、阿彌陀如來樣を天親菩薩は、淨土論に盡十方無碍光如來と仰せられて有ります、お光明の無碍自在なる佛と云ふことです、其光明は智慧の相なりと申しまして、阿彌陀樣のお智慧で有ります、阿彌陀樣の智慧は悲智双行と云ふて智慧の有りたけがお慈悲、慈悲の有りたけがお智慧で有る。吾々の智慧は別々である。智慧は有つても慈悲の無いものがある、慈悲が有つても智慧の無いことがある、卽ち惡智慧である、惡智慧だから智慧者反つて油斷がならぬ。盲慈悲だから盲慈悲。惡智慧だから智慧者反つて仇となる、これは智慧と慈悲とが別々だからである。

然るに阿彌陀樣のお智慧はそのまゝお慈悲の塊、そのお智慧をあらはして光明と云ふのです。光明に照熟、攝取、照護と云ふ三段のはたらきがある。凡夫の自性は虛假不實、欲といつはりばかりである、子供が生れて乳房ふくむが抑の欲の手はじめ、欲しいものがあれば泣いて威嚇し、いつはりて從ふ、これ虛僞の最初。これらが嵩じて種々の惡業煩惱を起すのである。此の如き虛假不實の凡夫なる故に善に趣き功德に歸することは中々困難である。然るに佛の光明は斯る惡業煩惱にも邪魔せられずして凡夫の腹の底へ照らし込み下されて、種々に御方便遊ばした揚げ句、凡夫が逃げたうても逃げられず嫌が應でも如來のお光明に攝取せられねはならぬ樣になつたを光明の照熟のおはたらきと云ひます。この照熟の光明のおそだてにあづかつて、しぶとい愚痴な私が次第々々に如來のお慈悲に引きつけられ、いよ〳〵宿善開發、逃ぐる私が、にがさぬお慈悲の手にと

らへられた時、あなたのお慈悲は私のためのお慈悲ぞと了解りし時今までの照熟の光明が攝取の光明と云ふ位になるので有ります。

阿彌陀如來の御慈悲の了解せらるゝは、どうして出來るのでせうか、如來の名號が私のものとなるからで有る。如來樣のお名は南無阿彌陀佛の六字で有ります、此お名を御開山樣は萬行圓備の嘉號と歎賞せられ、眞實功德大寶海とも仰せられました。此六字名號には萬行具足し、諸善成就し、功德善根の總體で有りまするから善本德本とも申します。その廣大なる善の本、德の本なる名號が衆生私共の心中に印現したとき、其儘私の善本德本となる、これを不可稱不可說不可思議の功德は行者の身に滿てりとも、南無阿彌陀佛の主になるなりとも仰せられた、此名號は私共惡人を極樂に往生せしむる業作で有ります。依て正信偈には本願名號正定業と云ふて有る、名號が私共を極樂へつれ行くものであるといふことに疑晴れし時其業作が正しく私の爲めの業作となる、卽ち信心を獲る相で有ります。此獲信の時光明が私を攝取して下さるのである。

一たび攝取の光明にてらされぬれば、再び捨てらるゝ怖畏はない寐ても起きても常に光明の懷住居で有ります。あさましき私が生涯攝取の光明の中に起臥すと知らば、平常の行狀を謹まねばならぬ。

○親　心

「嫁の荷の重さは親のはたかな」、ならぬ中から娘の嫁入りに三荷五荷の荷の重さ、荷がズッシリと重いたけ、親の簞笥が輕くなり父母は寒中赤裸でブル〳〵もの、いとしの親心かな、どうで嫁入り荷物の簞笥には、父の羽織が帶に化け、懷中時計が生れ變りし長襦袢も入つてるだらう、母親の櫛簪、秘藏の指環が、情も綿も厚い

蒲團となつて這入つてある長持もあるであらう、それが親心ぢや、親の慈悲ぢや。佛樣の大慈悲心を此世で譬へつべきものは、親心程相應はしきものはあるまい、親心を以て佛心を推量してよからう、それ程慈悲深い親の前で、子が惡事を爲たならば父母は何と思し召すであらう、憎くめども捨てず、捨てされども嫌ふ、アーア善くない事を爲居るわい、情けなき氣に成りおつたと、神ぞ憎めど捨てはせぬぞよ、蔭になり日向になり、惡事を止めて堅氣になるやう、苦勞心配が一方ならぬのである、捨てぬならば厭はぬか、アヽどうして、〳〵我子と思やこそ、子の將來を思へばこそ、氷の雫を注きかけられたやう、身の毛を竪て、震ひ上りて嫌うぞよ。

佛樣も其通り、憎めども捨てず、捨てされども嫌う、お捨てなさらぬから罪障重くとなげかされ、罪あれど、障りあれど、智慧は無けれど、功德は無けれども、「根機つたなしとて卑下すべからず、佛に下根を救ふ大悲あり」下根を救ふ大悲あれば、罪を造るも妨げなきか、いや〳〵、捨てされども嫌ふ、身の毛を竪てゝおきらひ遊ばすぞよ、唯除五逆誹謗正法、嫌ひ玉ふを知つて、父母の前で惡事が出來るか憎みまします事を知つて、佛樣の御前で罪業が積めるか、妻にも子にも三分は明かさぬ心の奥も、掌に取る如く徹看しまします事を相手にして、思ふまゝきを誰が思ふぞ、言ふまゝきを誰が言ふぞ爲まゝきを誰が爲得るかや。

佛樣を相手とし、御恩報謝の思ひより、上盡一形の誠を致さば、一文不知の田夫野嫗も、おのづから宇宙遍滿の實在に合致する動作がなさるゝので有ります、經に曰く、信は道の元、功德の母、蓮如上人曰く、善智識のわろきと仰せらるゝは信のなきことなり、不孝

は親心を知らぬ故なり。

○此世の極樂

さて、我輩は日々動作行爲を爲ておらぬ時は有りませぬが、千種萬樣なる其の許多の行業は、大抵皆物質的なる目的又は動機の爲めに爲さるゝので有ります。兎まれ何と口實を附けて居やうとも、落ち着くさきは食ひたい着たいの凡夫心、愛妻愛子を凡と云ひ、惜身惜命を夫と云ふとかや、いづれ我、々所の執着たらぬは無しで有りませう。特に妻子を携ふるに至ては、いとし可愛も愚痴の縛着、愛は欲となり、欲は癡となりて、わが身と眷屬との肉體上の希望に追はれて、可惜一生を愚痴の奴となりはつるのであります。

されどわが此の肉體いかに愚痴をつのりて愛すればとて何程の所詮かある、昨日までも今朝までも、夫よ父よとかしづかれたりし身も、三寸息絶ゆるが最後、屍骸よ死人よとて、子さへ妻さへ恐ろしがりて寄りついてくれぬでは無いか、野邊の煙の惡臭にまで、會葬者の胸をわるくさせ、吹けば散るべき灰となつてからが、我も眷屬も有つたものにあらず。かゝる果敢なき肉體の爲に、營々辛苦の一生が費さるゝことゝ思へば何ぼう頼りなきことでは有るまいか。云はゞ暖簾に力押し、最初から頼りなきを相手とするが故に、力を入れやうが、骨を折らうが、其働きに何等の生命も活力もない。肉體のあたなる事は、今更講釋されずとも誰しも承知の事なり。それを承知すればとて、まさか手を拱ぬきて生涯を遊びくらす譯にいかず否とよ、遊べとにはあらず、只働きに生命あらしめ、活力あらしめんと欲するのみである。卽ち我輩の行爲をして精神的たらしめねばならぬ、肉體は廢滅するたらうが、肉體に遡りて爲されたる行爲の

力即ち精神的現象の映照は千古不滅である。

今我輩の心は、其働きと共に肉體の奴隷である、即ち我が心は、果敢なき肉體に制限されて、短かき此世かぎりの心の如くなつて有る。然るに之れを大なる佛陀の御心に結び付くるときは、肉體の爲めの心たらずして、心は超然として肉體より獨立して、反つて肉體を使役するのである。肉體の心と、心の肉體との相違が有つて、肉體以上の心は三世徹貫であるが故に、其力には永遠の生命を帶びる、ので有ります。我輩淺ましき凡夫が、佛陀の御心と接する捷徑は他力の信心で有ります。他力の信心は凡夫が「空にして無力」となり、佛陀が「有にして有力」なる狀態で有ります。此の狀態と成たとき、我等は既に肉體的我では有りませぬ。

試に見よ、我等の行爲は奉公人的行爲では有りませぬか。奉公人

根性は如何に鄙しむべき言葉よ。奉公人なるものは主人の目をかすめて、取らるゝだけのあぶらを取り、兎かうして我がつとめを形式的に爲し終るまでゞある、故に其行爲はまるで畫にかいたものゝやう、親切もなく熟心もない。それもその筈で、つとめの爲めにつとめるのではなく、つとめ其物の勢威及び價値も知らず、只五尺の皮袋子を飲食衣住せしむる爲めの方便としてるからである。かくて得る所のものより外は只多からんことをのみ期待するのである。あゝ、されば我輩の行爲は奉公人的行爲の上乘なるものでは無からうか。我々が肉體の奴隷となりて一生を靡消するも、のは、我心の權威を認め得ぬからである。然り肉の奴隷たる我には認めやうにも認むべき權威ある心は無いのである。奉公人に何で主人の權威が認められやう、謂ゆる「我」なる狀態より超脫せざる限り

心に心の權威は具はらぬのである。「我」なる狀態より超脫するとは、即ち肉體の束縛を脫却することで、「無我」なる光景である。無我は小なりし心が佛陀の大心と接着する光景である、佛陀の大心と接着する心は、即ち宇宙の實在と合致する心である、六合に亘り、三世に徹す、悠遠にして至大、永來ばかりが御信心のはたらき場所ではない、涅槃淸淨土のみが信心の世界ではあるまい。一たび他力の大信を決得し得なば、佛願の大悲にもようされ、おのづから痴愛の縛着もうすらぐなり。家庭の淸淨も、兩性の戀愛も、勤王も、愛國も、善も德もすべて信心の上のことなり。「善智識のわろきと仰せらるゝは信のなきことなり」。とは最もなることなり。さるに信心をば遙か未來に押しかたづけて、此世は惡逆の自性ぞと猶肉慾に籠紆せられて甘ずる條、甚以て不心得千萬と言はねばならぬ。

獲信の德は死んで越ゆてう冥途のさすらひに安堵なるのみならず娑婆情海の波浪をわたるにも、寬き佛心に立ち戻れば何條堪忍できぬ時やあらん。愚痴も瞋恚も、高き御心を仰望せばいかで消熄せざらん。風にも雨にも、月にも星にも、佛の御聲を聞かば、あゝ誰れか猶逆惡の痴愚をつのるの勇あらんや。されば事々物々に佛心に立ち歸り、信心に相談せよ、鳴る瀧の夜の嵐にくだかれて、散る玉でとにやどる月かげ、賞められるゝも、詆らるゝも好助緣。浮くも沈むも增上緣。心を弘誓の佛地に樹て、心を以て肉體を使役し、情を難思の法海に流す、家庭の楫を法義に取り、妻子眷屬の水夫かんどり、調子揃へて勇ましく渡世せば、それが即ち此世からなる極樂ではあるまいか。此世の極樂！予は此言の廣く了解せられんことを望むので有ります。

㈢稱名念佛（心の護術）

御文章には毎々稱名念佛すべきことをすゝめられてある、或は寢てもさめてもと云ひ、又は、命のあらんかぎりはなど、すこぶる切におすゝめになりてあります。獨り御文章のみではなひ、高祖大師以來的々の御化導である。

偖、稱名念佛する心持は二通りある。一には歡喜二には懺悔。歡喜の念佛とは、佛願の不思議によりて、三世の業障一時に罪消えて薄地底下のいたづらものが生きては正定聚不退轉の身となり、死しては永々劫の苦患を免るゝことを得せしめ玉ふことを思ひ、娑婆の雜緣、目前順逆の事境に觸れては、わが身の仕合せをよろこび、廣大の佛恩を歡喜讃仰して、おはらず發する念佛なり。又懺悔の念佛とは、旦暮日夕怒りに狂ひ、愁ひに沈み、見聞覺知の處、過ちを累ね、罪を重ぬることと幾何ぞ、云ふまでもなく、爲までもなく、思ふまでもなく、我等の生涯は、しかしながら、三業の罪惡史ならずや。さるからに犯しては悲み、過ちては悔ひ、かくて心の和平は常に破らるゝのである。此時や我ながら淺間敷さに堪へで叫び出づるもの、即ち懺悔の念佛である、吾人は歡喜の念佛と、懺悔の念佛とによりて、受けし心の傷みを緩ふし、遠からぬ大果を歡び乃ち爰に新なる勇氣を得て、比較的安穩なる、心落居たる生活を遂ぐることを得べし。されば蓮如上人は、念佛を勇みの念佛と仰せられたるは誠に味ひ深く、意切なる御詞と思はれます。我等は念佛もろ共の生涯を經ずしては、到底勇氣と和平はのぞまれぬのであります。

然れば稱名念佛は吾人の心の護衛である。

曩きに元山沖に於て金州丸の慘事あり、近くは對島附近に於て常

陸丸、佐渡丸の災禍ありで、幾多の忠勇なる將卒と、多大の輸送力とを失へり、誠に痛恨の事である。武裝なき船は到底軍艦に敵することは出來なひから、みす〳〵指を咬へて敵のなすまゝにまかすよりは外はない、ばかなきものは我を亡すべき水雷の飛び來るを、ハつとながめて居らねばならぬ乘組軍人の運命ではなひか。一度ならず二度迄も、何故にかゝる悲劇はくりかへされたであらふ？護衛軍艦がなかつたからでありませう。護衛なき運送船と、强力なる敵艦！力士と赤兒との取組みの樣なものであらふ！。

色聲香味觸法の六境は、恐る可き敵艦隊である。此六隻の敵艦に日夜包圍攻撃を受くる吾人の心は、あはれ金州丸や常陸、佐渡などの運送船の運命と同ドではあるまいか、聞けば聞き腹、見れば煩惱一切の惡業は無始の貪瞋痴、身語意志より生ず、攀緣の水雷は我生

涯の船を覆すに足るのである。さすが帝國の軍人は防禦なき運送船上に敵艦の襲撃を蒙るとも、誰一人敵艦の捕虜になるものもなけれ共、我等の力弱き心は、直に惡魔に降服するのである、寧ろ我等の生涯は敵艦に臣事するものであると云ふが適切であらふ。人間の智力は隨分廣大なものである。然しながら實行の根基たる意志の力は案外に薄弱なるものである。云はゞ赤兒の腕力と一般である。力士の如き外境の猛力にかゝりては、捩ぢもされ、もがれもさるゝ、かくて一生は惡魔の捕虜とならねばならぬ、淺間敷き事ではあれど詮方なき次第である。

されば吾人が處世は必ず心の護衛艦を待たねはならぬ。心の護衛は念佛である。右に歡喜の勇氣を振ひ、左に懺悔の安慰を得て、稱名諸共三業に動作せば、砲彈水雷上下に破裂し、濃霧四邊を包むとも

むさと愛欲の廣海に沈没しはつることはなからふ。

○實驗の教訓

予は毎々新聞雑誌によりて、今日迄世に紹介せられたる征露軍人の海軍將卒中、種々偉勳殊功を建てたる諸氏の平生性行を承領する毎に、深く々々胸奥に感受するもの有り。此等の勇武絶倫なる諸將卒の閲歴性行を綜合して、種々なる我が感受を一括して、茲に新に二大教訓を得たりしことを喜ぶ、實に予は今回の活きたる實驗によりて、事新しく吾が神經を刺激し、吾が意志を覺醒せしめたる二大教訓に向つては、繰り返し深き感謝の思ひを表はすを禁ず得ざるなり。

二大教訓とは何？。今日迄で吾人の耳朶を新にせし、新聞雑誌の華となりて熟心なる帝國民の同情敬仰の想ひを牽制したる、忠武なる出征軍人——海軍の諸將卒——中、特に一世の聳動したる勳功抜群なる諸多勇士は果して如何なる經歴を有するか？。富家に長ずて學資豊かに、順序よくスラ〳〵と學校を卒業して任官せし人なるか不思議にも、世に唄はれたる武士の鑑は富家の子弟に尠かりき。學資滿足なるものに尠かりき。學校を卒業するまでスラ〳〵と順序よく何の苦勞なかりしものは尠かりき！。

新聞雑誌は、今の名譽ある何々佐官が、其の學生時代に牛乳配達夫なりしことを報せり。學資の乏しきが爲めには車夫をも營まざるを得ざりしを報せり。某々尉官は同郷の先輩の玄關番たりしことありしを報せり。拂ふべき金なきが爲めに下宿屋を逐はれたりしことありしを報せり。堂々たる今の勇士も、一ケ年の學資を得るが爲めには如何に其が腦漿を絞りしぞ、首尾よく一學校を卒業せんが爲め

には戰ならで空紅の血の涙を流せしぞ。

不思議や今までに世に傳唱せられし偉勳赫々たる勇士の多くは、富家の子にはあらで、必ずしも名門の出にはあらで、學資に苦勞せし、衣食に心配せし、あはれ當年の苦學生なりけらし。能く事を爲すもの多くは苦學生なりけり！。……これ予が新に得たる教訓の一箇條なり。

吾人は新聞雜誌により此等烈士勇卒の多くの書柬を看るを得たり、皆訣別の辭を故郷に致すもの。彼等は固より勇氣六合を壓するもの、銳敢鬼神を蹴らんと欲するもの、滿身の膽只其職に殫れんことを期し、熟誠の志只君國に忠ならんを思ふ。されば其の辭簡にして平、其の文直にして略なるを例とすと雖も、而かも不言の間不說の裏、直にして略、簡にして平なるの中に、餘音嫋々餘意脉々其の如何に親を慕ふことの深きや、妻を愛することの切なるや、子を忘れざることの篤きやを、看取するに難からざるなり。諸君試に一雜誌一新紙を取りて之を檢せよ則ち思半に過ぐるものあらん。彼等の書柬は卽ち詩なり、卽ち歌なり。艦上の武人は。卽ち家庭の愛の子なり。

出でゝ、果決大事を斷ずるものは、入て家庭の綿々たる温情に醉ふの人なり！。……家庭の趣味を解し、戀愛を解するものにあらずは英雄たる能はず、否、君國の忠臣たる能はず……これ予が新に得たる教訓の第二箇條なり。

斯くの如くして予は今日まで已に顯はれたる征露軍の勇士の性情閱歷を綜合して、一、思難能く人を作る。二、英雄愛を解す。

の二教訓を得たり。此の二教訓は今始めてことにあらず。古人も言へりき、今人も言ふ、西書にも述べ、漢籍にも述ぶ。されど此の古き教訓を、言を以てせず、字を以てせず、直ちに躬行實歴に由りて示されたることは、予が今更新らしく感せざるを得ざる所以なり新らしく感じて更に吾人が反省の強き資料とせざるべからざるものなり。

予は此の感を應用して、監獄の囚人に斯くは說きたり。汝等よ、されば汝等は汝等の境遇を喜べ予亦汝等の境遇を羨むなり。監獄に在るの苦痛は此世の餘所に於て嘗むべからざる特殊の苦痛なり。心にも身にも特殊の強き苦痛を嘗むることは何等の僥倖ぞ。甘き幸福は辛き苦き經驗の結果なり。然れは監獄は鍛錬の學校なり、脩養の道場なり。果を以て因に名くれは福堂なり。愼みて寸陰を惜しみ、

出來得るだけ多くの苦き經驗を在學中に味ふべし。汝等よ、汝等は家庭の趣味てふことを解せりや。家庭の趣味を知る者にして能く犯罪を爲し得るか。汝等は能く妻子を愛するか。しばらく妻を愛することに就いて語らしめよ。

妻を愛するとは、妻を敬ふなり、敬なければ狎るゝなり、眞の愛にあらず。身に換へて妻をいつくしむことは、必ず妻を敬し得て始めて至ることを得るなり。妻を視る奴婢の如く翫具の如くするが故に、一家の柱石たるべき妻と、金の爲めに機嫌をとる賤妓とを秤にかけて反て奴婢に劣る賤妓の陋術に翻弄せられて、所謂山の神を氣の利かぬ、陰氣な、小癪な生意氣者として罵り侮るに至るなり。されは有り難き妻の價値を諒せざるが故に敬する能はず、亦愛する能はず、斯くして如何ぞ家庭の趣味なるもののあらんや。趣味なき家庭

に家道の隆盛を望むことは難し、家道衰へて遂に犯罪生ず、然れば家道の衰頽犯罪の搆成は卽ち家庭の柱石たる妻を愛せざりし天罰なり。

汝等よ煩悶に渇ける汝等の口に、甘き樂の水を得んと思はゞ汝が妻を敬へ。汝が子女を美はしく教育し、汝が家門を興復せんと希はゞ、宜しく汝が山の神大明神に三拜九拜することを忘る勿れ。妻は奴婢にあらず、翫具にあらず、いづくんぞ海山千年の賤妓と日を同ふして比校するを得ん。家庭の愛を知りて而して始めて社會の愛を知るべし。人を愛することを知るべし。職務を愛し、正義を愛することを知るべし。艦上塑を横たへて、月下靜かに家庭の愛を想ふ人卽ちこれ正義を愛し、職務を愛し、社會を愛し、國を愛して遂に吾が身を犧牲に供へんことを期する盡忠の武士にあらずや。重ねて諭

く、監獄は修養鍛錬の道場なり、分陰を惜みて工夫せよ。工夫萬端蓋し出獄後必ず其妻を愛すべきの事より着想せよ。

夫婦なかよいがまことの根となりて
末でさかへる家の繁昌
植てみよ花の育たぬ里もなし
心からこそ身はいやしけれ
よしあしのうつる姿の影ぼうし
よくく見れば我すがたなり」

附錄

信海一滴　終

明治三十八年三月一日印刷
同　年三月五日發行

不許複製

著作者　苅屋哲公
京都市油小路御前通上ル
發行者　清水精一郎
京都市木津屋橋堀川東入
印刷者　井出時秀
京都市木津屋橋堀川東入
印刷所　六條活版製造所

發行所　京都市油小路御前通上ル　興教書院

發賣所　東京市本郷四丁目　文明堂書店
廣島市堺町勘商場　洗心書房

明治三十八年二月一日印刷
同　年二月五日發行

不許複製

著作者　苅屋哲公　京都市油小路御前通上ル
發行者　清水精一郎　京都市木津屋橋堀川東入
印刷者　井出時秀　京都市木津屋橋堀川東入
印刷所　六條活版製造所

發行所　興教書院　京都市油小路御前通上ル
發賣所　東京市本郷四丁目　文明堂書店
廣島市堺町勘商場　洗心書房

大行寺信曉師述　佐々木量俊師校

五帖一部
御文章講話
全五冊　實價五拾錢　郵稅八錢

蓮師御製作の御文章は本宗に流を汲ひ者は朝夕拜誦せらるゝも其義理深奥にして容易に蘊底を伺ふこと難し從來右解釋書數多出版せりと雖も或は高尚にして素俗に適せず或は簡短にして義趣を解せず實に遺憾に堪へざりしが幸に本書は山海里の著者大行寺信曉師が一言一句に付き懇切に誰人にも解し易く講話されし者にして今般更に訂正を加へ最も傍訓を附し婦女子に至るまで御文の難有思召を伺ひ得る樣出版せし者なれば僧侶諸彥は更なり信徒諸氏も是非一讀せらるべき良書なり

譯憲忍師編述

一五帖一部
御文章來意鈔
全一冊　實價參拾五錢　郵稅六錢

本書は御文章五帖一部八十通の來意緣由を一通一通に詳述せられし者なり然るに從來大本十四卷七冊の大部なりしを以て今回讀者諸君の便宜を謀りて縮刷出版せり

釋了信師述

通俗
正信念佛偈誡吹
實價貳拾五錢　郵稅四錢

本宗に流を汲の徒朝夕拜讀する正信偈は僅に百二十句六十行にして三朝高僧の解釋により眞宗の要義大綱を明す者なれば其義理深奥にして容易に領解し難し古來是に就て註釋せる者數を知らず然れども概ね高尚に亘り簡易に註釋せる者殆ど稀也然るに本書は譬喩因緣を交へ最も解し易く述られたる良書也

大行寺信曉師述

三帖和讃講話
內四三帖和讃數百首抄
實價六拾錢　郵稅八錢

本書は三帖和讃に就て誰人にても解し易く最も懇切に辯述されたる珍書なり

大行寺信曉師述

大原問答勸導
實價拾五錢　郵稅貳錢

右は大原問答の由來を平易に說敎されし者也

苅屋哲公師、富井隆信師

佛教 修身講話

實價廿錢 郵税四錢

本書は監獄囚人に對して、多年教誨せられし、實驗の修養談なり。故に佛教信仰界の入門初歩に尤も適當なり。又家庭教育の修身書として尤も適當なり。本書の大要

○精神の家宅○精神の指導者○二境の迷ひ○悲智二門○人生と宗教○處世の標準○眞正の力○眞正の至誠○煩悶なき生活○君の恩○親の恩○佛の慈光○社會の恩○煩惱の原因○目的と手段○教育の話○孝は百行の本○實驗の教訓○他力攝化○稱名念佛以下數題なり

仰誓師僧純師大行寺元本十冊縮冊二冊

●妙好人傳

實價二拾五錢 郵税八錢

●出征軍人慰問 法の音信

十冊拾錢 郵税二錢

本書の目的出征の校士が、信心の得ようを細かに説明せり、實に有難き一讀愉快に感ぜる冊子なり、終りに手紙書く處あり、故に手紙と共に封して參錢で屆く、出征者の父兄朋友知己は之を送れよ

翠村濱口惠璋師編纂 ●全二冊美本

新妙好人傳

三版 實價卅貳錢 郵税六錢

先に仰誓師僧純師、大行寺相次ひで、妙好人傳を著し、後の世の人をこの御法義に誘引せんため、又報佛恩の助緣とせられたり而して其後今日に至る迄、明治の新妙好人卅余名の言行美談を集む尚宗意安心の諸大德法語、手紙數通を集めたり

實地應用 軍國の布教

●石版美本 實價 參拾錢 郵税 六錢 ●二月廿五日迄に御申込

●新版

振古未曾有の大事變なれば、我帝國民は擧國一致ならざるべからず堅忍持久ならざるべからず、特に宗教家は平時と異り、目前無常の有樣を見聞し、直接出征軍人は元より、家族、遺族、朋友知己に至るまで一般の國民生死問題に心をかけ、眞の求道者至る處にあり、これ佛教の信仰を皷吹するの秋なり他力易行の法義を宣布して、全國民に大安慰を與ふるの時なり、隨つて時機適當の布教を要す本書は實地應用說教の新良材を與ふるもの也

○忠勇傷病の慰問
○武道と佛道
○決死の前日
○忍と不忍
○追弔の精神
○追悼の赤心
○大和魂と佛教
○信徒の心得
○出征軍人慰問
○國民の覺悟
○教誨の答書

島地嘿雷師
佐藤巖英師
南條文學博士
赤松連城師
名和淵海師
富井隆信師
妻木直良師
鈴木法琛師
江上西生師
本多周山師
安藤義導師

○出征の覺悟
○遺族に告ぐ
○信仰の必用
○戰爭と婦人
○此外大家數人
○勇士の求道書簡
○追弔文
○軍人の信仰美談
○軍人の活教訓等、悉く時勢適切なる活資料なり。

松島龍觀師
村上璋眞師
八尋慈薰師
小野島師

數十通
數通

●發行所 京都汕小路御前通上ル 興教書院

苅屋哲公師、富井隆信師

佛敎 修身講話

實價廿錢 郵稅四錢

本書は監獄囚人に對して、多年敎誨せられし、實驗の修養談あり。故に佛敎信仰界の入門初步に尤も適當あり。又家庭敎育の修身書として尤も適當あり。本書の大要

○精神の家宅○精神の指導者○二境の迷ひ○悲智二門○人生と宗敎○處世の標準○眞正の力○眞正の至誠○煩悶ある生活○君の恩○親の恩○佛の慈光○社會の恩○煩惱の原因○目的と手段○敎育の話○孝は百行の本○實驗の敎訓○他力攝化○稱名念佛以下數題あり

仰誓師僧純師大行寺元本十冊縮冊二冊

實價二拾五錢 郵稅八錢

妙好人傳

出征軍人慰問

法の音信

十冊拾錢 郵稅二錢

本書の目的出征の校士が、信心の御ようを細かに說明せり、實に有難き一讀愉快に感ぜる冊子あり、終りに手紙書く處あり、故に手紙と共に封して參錢で屆く、出征者の父兄朋友知己は之を送れよ

翠村濱口惠璋師編纂 全二冊美本

新妙好人傳

三版

實價卅貳錢 郵稅六錢

先に仰誓師僧純師、大行寺相次ひで、妙好人傳を著し、後の世の人をこの御法義に誘引せんため、又報佛恩の助緣とせられたり而して其後今日に至る迄、

明治の新妙好人

卅余名の言行美談を集む

尙宗意安心の

諸大德

法語、手紙數通を集めたり

實地應用

軍國の布敎

振古未曾有の大事變あれば、我帝國民は

擧國一致

あらざるべからず、我帝國民は平時と異り、目前無常の有樣を見聞し、家は元より、家族、遠族、朋友知己に至るまで一般の國民直接出征軍人あらざるさかしらを、特に

宗敎

に心をかけ、

眞の求道者

至る處にあり

生死問題

これ佛敎の

信仰

の法義を宣布して、全國民に大安慰を與ふるの秋あり

他力易行

の新良材を與ふるもの也

隨つて

時機適當

の布敎を要す

本書

は實地

應用說敎

の時あり、

出征軍人慰問

法の音信

目的

本書

新版

●石版美本 實價 參拾錢 郵稅 六 ●二月廿五日迄に御申込

○忠勇 ○武道と佛道 ○決死の前日 ○忍不忍と ○忍耐の精神 ○追悼の赤心 ○大和魂と佛敎 ○信徒の心得 ○出征軍人慰問 ○國民の覺悟 ○敎誨の答書

島地嘿雷師 佐藤嚴英師 南條文學博士 赤松連城師 名和淵海師 富井隆信師 妻木直良師 鈴江法琛師 上西生師 本多周山師 安藤義導師

○出征の覺悟 ○遺族に告ぐ ○信仰の必用 ○戰爭と婦人 ○此外大家數人 ○勇士の求道書簡 ○追弔文 ○軍人の信仰美談 ○軍人の活敎訓等、悉く時勢適切ある活資料あり。

松島龍觀師 村上璋眞師 八尋慈薰師 小野島師

數十通

●發行所 京都油小路御前通上ル 興敎書院 (三)

勸學善讓師述○福田行忍師編
●安心法話聞書　實價拾四錢　郵稅四錢
旭恢恩師述
●說教本願成就文　同拾貳錢　四錢
筑紫大德法話餘滴○蒔田師編
●譬喩自在一口法話三冊　同參拾六錢　六錢
龜山法因寺渥美師
●超世本願御文說教　同貳拾五錢　四錢
赤松師題、是山師校、井上師述
●二種深信謙敬錄　同參拾五錢　六錢
勝山善巧師述
●現生十種益說教　實價拾參錢　郵稅貳錢
梅原教願寺說教
●聖人一流說教　實價拾五錢　郵稅四錢
佐竹智應編
●蓮如上人御傳繪鈔　實價廿六錢　郵稅六錢
補教米村永信師著
●宗要安心論題　實四拾五錢　郵八錢

勸學姫宮大圓師述
●五帖一部御文章皷吹　壹圓八拾錢　郵拾五錢
同上
●五帖壹部御文來意鈔　實價參拾錢　郵稅六錢
中谷淨林師述
●信卷大信結嘆辨　實價貳拾錢　郵稅四錢
勸學足利義山師述
●眞宗法義示談集　實價貳拾錢　郵稅四錢
勸學原口針水和上述
●六字釋法話　實價四拾五錢　郵稅六錢
福成寺大仙師述
●四十八願說教　價四拾五錢　郵稅八錢
東保福專寺神子上師
●善導和讚說教　實價四拾錢　郵稅六錢
石河即行師述
●末代無智說教　實價拾五錢　郵稅四錢
求念院藤枝令道師
●正信偈講話　實價參拾錢　郵稅六錢

名和淵海師述
●軍人の覺悟　實價金七錢　郵稅金貳錢
宗意安心を尤も平易に簡明に說明せしもの
勸學島地默雷師述
●忠勇傷病の慰問　實價金參錢　郵稅金貳錢
戰爭と佛教の關係より、眞宗教義を說明す
本多周山師述
●戰時信徒の心得　●百冊六拾錢　小包拾五錢
江上西生師述
●出征軍人慰問法の音信　●百冊九拾錢　小包拾五錢
妻木直良師述●石版表紙
●大和魂と佛教　●新版
一冊壹錢五厘、百冊壹圓參拾錢、小包貳拾錢
名和淵海師述●同上
●追弔の精神　同上
富井隆信師述●同上
●追悼の赤心　同上
富井隆信師述●同上
●持久の覺悟　同上

高木擢堂師述●石版表紙
●御佛の慈悲　●百冊壹圓貳拾錢●小包貳拾錢
同上●同上
●忠勇傷病の慰め　同上
大內惠明師述●同上
●慰問講話　同上
富井隆信師述●同上
●處世の心得　同上
佐藤巖英師述
●軍人心の友　金五錢　郵稅金貳錢
熱田靈知師校閱
●原人論和譯　金參錢　郵稅金貳錢
高木、八尋兩師共纂
●眞宗寶訓　金五錢　郵稅貳錢
三部經、七祖聖教、眞宗法要、御和讚、御文章等の內より○求道の部○安心の部○報謝の部と部門を分ち、求道者の用求に應ぜ

●發行所　京都油小路御前通上ル　興教書院

翠村濱口惠璋師述
●古英雄と宗教　實價貳拾錢　郵稅四錢

精神界記者曉烏師述
●死の問題　實價拾八錢　郵稅貳錢

同上
●靈的生活　實價廿八錢　郵稅四錢

文學士清澤滿之師外
●精神主義　實價參拾錢　郵稅四錢

文學博士前田惠雲師述
●眞宗道德新編　實價廿五錢　郵稅四錢

三原雪濤師編
●七里恒順言行遺錄　實參拾五錢　郵稅六錢

樹德館編纂
●尋常高等修身教訓　●和本八冊　實八拾五錢　小包拾五錢

南軒富井隆信師述
●佛教修身人の道　實價廿五錢　郵稅四錢

同上
●佛教渡世談　實價廿五錢　郵稅四錢

干河岸貫一師述
●婦女修身の心得　實價廿五錢　郵稅四錢

苅屋哲公師述
●佛教修身講話　實價貳拾錢　郵稅四錢

赤松師題永井龍潤師述
●佛教歷史問答　實參拾五錢　郵稅六錢

赤松連城師題、勝山師述、●和本二冊
●正信偈問答記　實價卅八錢　郵稅六錢

東陽圓月師校、覺照師述
●和讃雁峰錄　和本　實壹圓卅錢　郵稅拾錢

島地師題、東陽圓月師述
●宗要百論題　和本　壹圓七拾錢　小包拾五錢

內田關寧師述
●宗要開關　實價參拾錢　郵稅六錢

眞實院大瀛師
●眞宗安心十諭　實價卅五錢　郵稅四錢

粟津義圭師述
●御傳鈔講話　實四拾五錢　郵稅拾錢

安田得忍師編纂
●全二冊
●譬喩合法錄　二版
●實價四拾五錢　郵稅八錢

本書は眞諦即ち安心談の材良を主として集む　●勸序辨三十題增補せり

第一法說部に於て（安心）二十題の譬喩合法
第二譬說部に於て（安心）三十題の譬喩敎誨
第三因緣說に於て　二十題の因緣合法
第四敎誨要語部に於て　五十條の譬喩短辯
第五眞俗二諦部に於て　二十條の要文引用
第六寓意說の部に於て　十五題の面白き話
第七無常說の部に於て　十條の悲哀の要文
第八應用雜說の部に於て二十題の法譬辯談
第九悲歎述懷和讃全部說敎　譬喩因緣數十個條

本書は確實なる道理ある、譬喩因緣にして悉く眞俗二諦の敎義に合法せるものなり

翠村濱口惠璋師編纂
●教家の新資料　全二冊
●實價五拾錢　郵稅拾錢

本書の內容は世間即ち俗諦談の良材料を主として集む、書中左の十章に分ち無慮三百ヶ條餘の

第一「敎義と法語」　第二「身心の修養」
第三「座右の箴言」　第四「古人と今人」
第五「宗敎の分類」　第六「統計の智識」
第七「家庭の敎養」　第八「和歌と俚謠」
第九「譬喩の敎訓」　第十「山蘊海藏」

敎訓や聖話や、譬喩や因緣や、學說や修身談や、實行談を集めたるものなれば、布敎傳道の新資料は、混々流れて盡きぬ、清泉の如きもので御座います、然して何れも皆確實なる新事實にして、明治の今日に適切なる資料也

●發行所　京都油小路御前通上ル　興敎書院

●三帖御和讃全部●正信偈訓讀●三誓偈●嘆佛偈●阿彌陀經●亟三寶偈●御俗姓●領解文●御文章數通●夏の御文四通

新刻 懷寶 正信偈御和讃 全

堅三寸三分横二寸三分●價廿六錢郵費二錢
右和讃と同寸方

●五帖御文章 一部
右和讃と同寸方●帙入カヘリ點付 金貳拾五錢 郵稅貳錢

●懷寶 淨土三部經
●懷寶 三書寶典
右は三帖和讃●御文章●三部經の三冊帙入
何れも新版にて薄用上等なり 金貳拾五錢 郵稅四錢

●懷中 正信偈和讃 寶價貳拾錢 郵稅貳錢

薄用帙入

●校點 淨土三部妙典 大折本 全四冊
上等壹圓參拾錢並壹圓●小包拾五錢

●三部妙典 句讀清濁字音 付中形折本
●鳥ノ子紙四拾錢並參拾錢郵四錢

●聲名集 上等金八拾錢並金六拾五錢郵稅八錢

●例年作法 早 金參拾參錢 郵稅貳錢

●阿彌陀懺法 早 金貳拾八錢 郵稅貳錢

澤圓諦師章譜 ●新版
●眞宗禮讃偈 特上參拾錢 郵稅四錢
上等貳拾五錢並貳拾錢郵稅四錢

澤圓諦師章譜 ●帙入新版
●正信偈和讃 金貳拾五錢 郵稅貳錢

少年教會用●木版小本
●正信偈和讃 御文章一冊四通 郵稅貳錢

●同 一冊六錢 郵稅貳錢
●偈文、小經入

勸學赤松連城師題辭
中谷渡月師述

眞俗教士鑑

全二冊 價四拾五錢 郵稅八錢

教學とは一實際的學理にして他

學とは即ち學理を缺けば本書は即ち實際的學理にして實際に迂き際にして學理に乏しく實地に東西各地に布教し、傍ら其の腹案を筆錄せしもの即ちこの五十題なり

帶びて、實地腹案を筆錄せしもの即ちこの五十題なり

○平生業成○人生の目的○求法の心得○聞見の一致○病子偏重○意業と正義○佛陀の念力○欣厭の妙術○順逆の法緣○君臣の大道○親子の大道○克己の心意○聞信の義○師弟の大道○夫婦の關係○師弟の大道○克己の心意○聞信の義○相○知恩と報德○宿善と開發○愛樂佛法味○神佛の一体○眞心の徹到○眞如一實○內食妻帶○慈善の意義○不壞の眞心○信疑廢立○社會に對する德義等の五十題なり

五十題とも一題一席となし、各々其出據を示し、譬喩を交へ因緣を談し以て二諦の精神を明了ならしむ

利井鮮妙師題辭
安國淡雲師述
是山惠覺師述

美本二冊かきつき 定價六十錢 郵稅十錢

前田慧雲師題辭◉安田得忍師辯述

●說教 三信字訓談

（木版和本四冊）

實價金四拾五錢
郵稅金六錢

右說教三信字訓談は。銘文に出でたる三信の御釋と照し合せ。尙其の御文を讚題とし信卷の三十三通りの御字訓を。一々誰れにも了解し易き樣。譬喩因緣を交へ他力安心の一途を詳細に說教せられしものなり

特に眞宗三大家の說教を參考として編述したるものなれば。其說の確實なる其辯述の流暢なる未だ其比を見ず。而して每席第一序辯、第二釋義、第三引例、第四餘辯と四段に分ち。以て一席の長短を自由にす。又右四段は何れの法席にも活用することを得べし。實に說教の模範とすべき說教書なり。

赤松連城師口演

●演說說教集 全二冊

紙數六百頁

實價金四拾五錢
郵稅金●八錢

師の能辯博識なるは世人の知らるゝ通り。此の演說、說教集は。師が嘗て時勢に適し其機を見て。實地に教誨せられし演說、說教六十餘席を編纂せしものにて。法の園第一號より第百號迄に揭載せしものを更に別冊とせしもの也。其の良書なること弊院の言を待たず

文學博士井上哲次郎著
●釋迦牟尼傳 並六拾錢 郵稅拾錢

小野藤太先生著
●弘法大師傳 並四拾五錢 上六拾錢 郵稅八錢

境野黃洋先生著
●聖德太子傳 並四拾五錢 上六拾錢 郵稅八錢

高島圓先生著
●一休和尙傳 同上

大內青巒閱峰玄光著
●道元禪師傳 同上

釋宗演師閱●大崎龍測師述
●白隱禪師傳 同上

文學博士前田惠雲著
●大乘佛教史論 上八拾錢 並七拾錢 郵稅拾錢

佐々木月樵師著
●實驗の宗教 金六拾錢 郵稅拾錢

翠村濱口惠璋師述
●心靈上修養 金參拾五錢 郵稅六錢

精神界記者曉烏敏師著
●吾人の宗教 金貳拾五錢 郵稅四錢

文學博士近角常觀師著
●信仰問題 並五拾錢 上六拾五錢 郵稅八錢

浩々洞々人合著
●佛教の信仰 金參拾錢 郵稅四錢

三博士合著
●佛教講演集 同上

文學士清澤滿之師著
●精神講話 同上

楠龍藏師著
●他力宗教論 金參拾五錢 郵稅四錢

文學博士井上圓了師著
●佛教通觀 實價五拾錢 郵稅六錢

故齋藤聞精師述●十一版
●佛教或問 實價拾六錢 郵稅貳錢

文學士蜷川龍夫先生著
●孔夫子傳 並六拾錢 郵稅拾錢

●發行所 京都油小路御前通上ル 興教書院